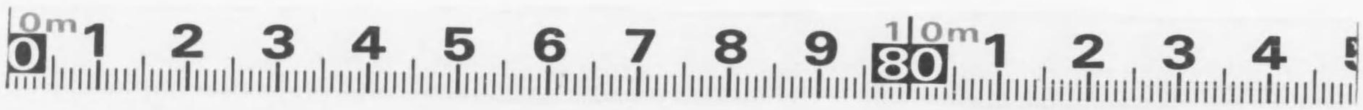
384
43

384-43
12005014553 60



29.10.20

蘇峰 德富猪一郎著

近世日本國民史 田沼時代

東京 民友社 發行

近世日本國民史

田沼時代

昭和二・一・二 帝國圖書館

上杉治憲畫像　（伯爵上杉憲章氏所藏）

384-43

修史偶言

天皇陛下御重患

大正十五年も、今や行〳〵將さに暮れんとす。而して上下を擧げて、我が今上天皇の御重患に、魂を駭かし、心を傷めつゝある。人事天候兩ながら蕭條の感に堪へない。

* * * * * * *

足掛け九年の修史事業

約十年にて第一期

翻つて考ふるに予が大正七年五月、近世日本國民史の筆を著け始めて以來、既に足掛け九年を經過した。此の間には我が身邊にも、國家の上にも、世界の上にも、非常の變化が來つた。予一個としては、大正八年二月には、九死一生の大患に罹つた。然も賴ひに予は一切を此の事業に献げ、且つ献げつゝある。予は當初十年計畫にて、完成せんと期した。然るに今や漸く第一期の終局に近きつゝありて、第二期孝明天皇、第三期卽ち編著の大眼目たる、明治天皇御宇

史は、尙ほ前途遼遠である。歳月は全速力もて奔るも、仕事は牛歩遲々。

百日に百里の方針

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

併しながら斯る大仕掛の仕事は、徐ろに且つ確かに、其の行程を辿るを以て、寧ろ安全と信ずる。されば予は決して一日に百里を行かず、百日に百里を行くの方針を取つた。

遂功累積制勝全局

即ち功を累積に遂げ、勝を全局に制するの方針を取つた。此の如くして今日に至る迄、既刊二十三卷、未刊五卷、通計二十八卷を稿了した。而して今や第二十九卷を、逐日著作しつゝある。

人力を盡すのみ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

惟ふに今後幾許の歳時を要して、完結す可き乎。亦た果して予の一生中、完結の目的を達し得可き乎。それは只だ天に問ふの他はあるまい。併しながら予は人力の及ぶ限りを、此事に盡さんとしてゐる。

業務上の

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

されば苟も事の此の業務と兩立せず、若しくは妨害となるものは、予は悉く

妨害物を片附く

之を片附けてゐる。此れが爲めには、世間の義理合、一般の社交、若しくは個人的享樂なども、殆んど全く頓著しないこととしてゐる。さりとて決して全速力は愚か、快速力をも出さない。

寧ろ依舊牛歩遲々

舊に仍りて牛歩遲々。若し遲々たるが爲めに、完成する能はずして止まば、是亦た致方なしとして、自から諦むるの他はあるまい。

一人の力にて著作

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の機會に於て、予の著作に關する一二の事情を申し添へて置く。予は全く予一人の力もて、此の著作に任じてゐる。固より資料收拾、原稿整理、其他に予の勞を分つの二三子がある。予は明白に其勞を認識してゐる。されど著作其物に就ては、決して二三子の力をも假らない。此れは負惜みでもなく、我慢でもない。予の方針が、全く此の通りである。

予の理想

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

予の理想を云はしむれば、司馬溫公が、資治通鑑に於ける、水戸義公が、大日

本史に於ける如く、當代最も超群の史才を集め、その衆力を以て、茲に不朽の大著作を爲したいのだ。されど予の微力では、到底斯ることは思ひも寄らない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

修史本來の素志

然らば寧ろ一人一個にて、啄木鳥が木を穿つ如く、兀々として日又日に、月又月に、歳又歳に、その精力を集中して、此の事業に傾倒するの他はあるまい。予には決して完全無缺の歴史を作らんとする程の抱負はない。されど少くとも近世日本國民史に就て、何物かを貢献したいと思ふ。而してそれ丈の事は、予一人の微力でも、苟も勤めて怠らずんば、必らず成就し得可しと信ずる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

他の好意は感荷

斯く云へばとて、予は決して世上の君子が、此の歴史を完成する爲めに、或は精神的に、或は物質的に、或は資料を供給し、或は遺漏を修補し、既知未知を論せず、予に向て其の援助を愛しむなきの好意を無視するものではない。予は實に之を感荷し、將來に向つても、尚ほ既往の如くならんとを祈りて止まない。

自力一方

されど本書の一字一行たりとて、予は決して他の力を假らず、自己の勞力もて果さんとの決心を、今後にも持續してゐる。而して此れが何時迄持續せらるゝ乎は、只だ天之を知るのみ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

前人の文書引用に就て

世間には予がくだ〳〵しく前人の著作、若しくは文書等を引用するを病む人がある。されど予は前人の功を竊むを欲せず、又た斯る資料はやがて湮滅するの虞あれば、せめて予の歴史中に保存せんとの微意に外ならない。若し斯る資料を咀嚼して、改めて予の文字とせん乎。此れは予に取りても手輕であり、讀者に取りても骨折が少ないであらう。されど歴史は小説ではない。歴史は只だ娯樂の道具ではない。古人の著作や、古文書を、その必要の點だけ、その儘本書に登載するは、只だそれ丈の事としても、大なる意義がある。繰り返して云ふ、予は決して勞を厭ふ爲めに然かするではない。予に取りては自から文字を綴ることが、他の文字を抄錄するより、如何ばかり氣樂でもあり、且つ面倒も少な

必要の點を登載

いのだ。然も有用なる資料の其儘なる引用は、予の修史上の主張である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

達意を主

單に文章として云へば、推敲の餘地は頗る多きを知る。されど予は只だ達意を主として、修辭を客としてゐる。他日若し全史を完了するを得ば、更らに其の總說とも云ふ可き一書を綴らんとを期す。その時には予も出來得る限り、修辭にも力を用ひんとを期してゐる。

大正十五年十二月十六日午前十時　大森山王草堂に於て

蘇峰六十四叟

田沼時代刊行に就て

田沼時代の汚濁と罪惡

田沼時代は、如何に史家の賞讃せんとするも、其の汚れ且つ濁りたる時代であるとを、看過する譯には參らない。如何に田沼が一代の政治家であつたとしても、其の世を毒し、風を壞りたる罪惡は、到底之を拂拭し得可きものではない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

小人中の偉物

されど彼は幕政中に於て、小人中の偉物であつた。彼は群小政治家中、其の手腕は決して尋常でなかつた。若し彼にして自から檢束し、且つ部下を檢束し、その才器を善き方面に用ひたらんには、彼は良に一代の能臣と云ふ可きものであつたであらう。惜むらくは彼は、士君子の敎養を缺き、只だ功利一遍の動物として、其の卓越したる才器を誤用した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

賄賂の問屋

彼が賄賂の問屋であつたとは、本書中之を特筆してゐる。今更ら繰り返すに及ばない。されど此れが爲めに、害を全社會に被らせたる一事は、更らにより大なる罪惡と云はねはならない。其の部下勘定奉行松本伊豆守、赤井越前守などの放埒も亦た、甚だしきものがあつた。當時京より藝妓を買取り、麗服を著けしめ、之を函に入れ、上書を人形として、進物に差し出したるものありと云ふ。活ける京人形の進物とは、此事であらう。

田沼の妾の事

田沼の妾は元小祿の時、ある楊弓場に出でたる女を召たるにて、後に千賀道有を假親となしたり。此が爲めに道有は囚獄の醫者から新たに召し出されて、侍醫法眼に命ぜられ、濱町に二千坪程の屋敷を買ひ、家屋庭園善美を極め、夏月納涼の座敷は、天井へガラスを張り、其中に金魚を蓄へたり。田沼妾宿下りの節は、右屋敷へ諸大名其他の者共、美味珍味を贈り、坐に滿てり。町屋敷も十八ヶ所程所持せり。〔五月雨艸紙〕

* * * * * * *

賄賂の相場

又た當時賄賂の相場としては、權門賄賂の甚しく行はれて、賢愚を問はず、天明安永の頃は、田沼侯執政にて、風潮一に此に赴きたるが、其折には長崎奉行は二千兩、御目附は千兩といふ、賄賂の相場立ちしと申す位なり。此時吉原町にまゝごとといふ音信物を調ふる家ありし由。是は五尺程の押入小棚樣の物出來、其中に飲食物、吸物、さしみ、口取、其外種々の種料より、庖丁俎板迄も仕込みあり。權家へ送與して、媚を取るの具なるが、大抵七八兩位より十四五兩迄の直段なりし由。〔同上〕

武士氣質全滅

斯る勢にて一世を風靡したれば、參河武士の士氣などと云ふものが、爪の垢程もなくなつたのも、決して不思議はあるまい。

* * * * * * *

君主の聰明を壅閉

田沼は實に小人の魁であつた。彼が君主の聰明を壅閉したるは、隱れなき事であるが、松浦靜山は、其の甲子夜話に記して曰く、

今の官醫栗本瑞見の祖父は、嘗て享保の御時の奥醫を勤て、德廟（吉宗）の御様子を目の當り見聞し奉りし者なりしが、或時御燕間に侍りて御尋の序、享保中の記憶したることども申上げり。先朝殊に御盛にて、是迄未だ御存無き御舊事ども聞食、御喜悅の御沙汰にて、此後折々侍奉りて、夫等のこと申上べしとの懇到の御諚あり。誰やらんその事つか〳〵と相良侯（田沼意次）に告しかば、翌日侯瑞見に逢て、したたかに叱り散らし、決して右様のこと御嘶申上まじき旨、苦々しく云て、又御左右の者に諷して、瑞見を召さゞるやうに拵成たりとぞ。

奸臣得意の手段

とある。果して然らば、三王外記に、山村信濃守良旺が、參河後風土記を、將軍家治の前に於て讀み、此れが爲めに田沼意次の瞋に觸れて、俄に出されたとあるのも、强ち無根の說ではあるまい。此れは日本支那に限らず、昔から奸臣の慣用手段だ。

* * * * * * *

開國曙光の時代

併しながら田沼時代は、實に開國の曙光を見たる時代だ。彼は開國家では無つたにせよ、決して鎖國の舊慣に囚はれたる漢ではなかつた。彼の時代は開國の曙光を見たばかりでなく、亦た幕府の紀綱紊亂の爲めに、勤王思想の發作を刺戟し來つた。されば彼は積極的には開國の恩人だ。消極的には尊皇の功臣と云はれないともない。單に其の効果から論ずれば、田沼時代は假令其の收穫は多からざるも、その多き收穫の種を播きたる時代であつたとを、記憶せねばならない。維新回天の氣運は、彼の爲めに長足の進轉を來した。

勤王思想の發作刺戟

大正十五年十二月十六日

大森山王艸堂に於て

蘇峰學人

例言

一　本篇は、大正十四年二月十四日起稿、六月四日脱稿。

一　田沼意次は、一方から最も非難せられ、他方に於ては、亦た其の解放的、積極的、開濶的政策及び手腕を識認せられてゐる。彼は幕府執政中、最も毛色の變りたる一人である。要するに小人の雄のみ。

一　本篇の後、松平定信時代、幕府分解接近時代、(或は家齊時代ともいふ、)雄藩篇、文政天保時代、天保改革時代は已に脱稿し、今や幕府内憂外患時代を起草中である。

一　本篇には、修史偶言の小文を添ふ。讀者の一瞥を希ふ。

一　本書の編纂、校正、其他一切前例に據る。

大正十五年十二月十六日大森山王草堂に於て、至尊御重患聊か御小康との吉報を耳にしたる際。

蘇峰學人

近世日本國民史

田沼時代目次

第一章　田沼時代概觀……一

一　幕政の降り阪……一

家重の不肖〔一〕　正味家重の時代〔二〕　大岡と田沼〔三〕　積極的献替者無し〔三〕　御用取次役權勢を得〔四〕　大岡忠光の立身〔四〕

二　田沼意次の官歴……五

意次の一生〔五〕　意次の父〔六〕　意次次第に登庸〔六〕　連署の衆となる〔七〕　其の子供〔七〕　意知斬らる〔八〕　意次失脚〔九〕

三　松平武元……九

武元の家柄〔九〕　武元の官歴〔一〇〕　武元の執政〔一一〕　武元の謙謹〔一二〕意次武元を長傅〔一二〕　意次增封亦武元に聽く〔一三〕　意次長傅の一例〔一三〕　門地

と在職久しき爲〔一四〕
四　田沼と將軍家治……一四
田沼の目先と手腕〔一五〕　大奥との賄賂〔一五〕　意次の手段〔一六〕　家治意次の關係〔一七〕　家重遺訓による〔一七〕　家治意次を叱斥〔一七〕　是れ史家同護の筆〔一八〕
註　家治幼時の氣力（甲子夜話）……一八
五　賄賂の問屋……一九
賄賂の先輩〔一九〕　意次の賄賂奬勵〔一九〕　唯意次の光を恐る〔二〇〕　意次の家に無き物〔二一〕　馬の形ある物皆集まる〔二一〕　外國貿易に影響〔二一〕　贈物の驕奢〔二二〕
六　田沼の門戸市の如し……二三
田沼家の客〔二三〕　面接方法〔二三〕　其臣下亦た同樣〔二四〕　井伊侯亦た贈賄〔二五〕　中秋進物の贅澤〔二五〕　機嫌取りの競爭〔二五〕　松本伊豆守の驕侈〔二六〕
七　賄賂は政治機關の動力……二七
上官眼中に無し〔二七〕　秋元涼朝の硬骨〔二七〕　意次一門の榮達〔二八〕　松本正敏の贈賄買官〔二九〕
註　ままごとといふ信物（五月雨草紙）……三〇

第二章　蘭學恢弘の二人……三二

八　蘭學興隆の先驅者……三二
一二の讃稱すべき事〔三二〕　蘭學二恩人〔三二〕　青木昆陽〔三二〕　昆陽の立身〔三三〕　蕃薯天下に廣まる〔三三〕　蘭書講讀を命ぜらる〔三四〕　昆陽の蘭學著述〔三四〕　多少吉宗に用ひらる〔三五〕
九　前野良澤（一）……三六
蘭學大成者〔三六〕　昆陽と良澤との關係〔三六〕　良澤の行事一斑〔三六〕　其の發憤〔三六〕　昆陽に學ぶ〔三七〕　長崎に學ぶ〔三七〕　長崎再遊〔三八〕　豁然自得〔三八〕　著書〔三八〕　門弟〔三九〕　解譯書〔三九〕
一〇　前野良澤（二）……四〇

奇物變人〔四〇〕 蘭化號の由來〔四〇〕 伯父全澤の教育法〔四〇〕 一筒截猿若を
も學ぶ〔四一〕 良澤蘭學始めの年代〔四一〕 何れにしても明和年代〔四二〕 吉雄
等との關係〔四二〕 良澤の貧〔四三〕

一一　杉田玄白（一）……四四

玄白の生時〔四四〕 西玄哲に學ぶ〔四五〕 外科醫開業、蘭學從事〔四五〕 西善三
郎に逢ふ〔四五〕 善三郎の忠言〔四六〕 蘭語學習の困難〔四七〕 玄白往時の回顧
〔四八〕

註　西善三郎等の著譯〔蘭學事始〕……四八

一二　杉田玄白（二）……四九

田沼の蘭學鼓吹〔四九〕 和蘭器物の玩賞〔五〇〕 和蘭客屋の繁昌〔五〇〕 外科醫
バブル〔五一〕 バブル醫術の巧妙〔五一〕 玄白一書を借受く〔五一〕

一三　和蘭風の流行……五二

人氣蘭風に向ふ〔五二〕 平賀源内〔五三〕 源内の才氣〔五三〕 スランガステーン
〔五四〕 加比丹の感嘆〔五五〕 種々物產書を贈らる〔五五〕

第三章　蘭學興隆の現象……五七

一四　和蘭學興隆の氣運到來す……五七

蘭書來る〔五七〕 玄白和蘭解剖書を得〔五七〕 岡新左衛門の助力〔五八〕 蘭書和
譯を欲す〔五九〕 實地觀臟の機會を得〔五九〕 玄白の喜び〔六〇〕

註　我が國人體解剖の始め〔溫知醫談〕……六一

一五　人體解剖實驗……六二

玄白の學者的態度〔六二〕 同志を誘ふ〔六二〕 良澤をも誘ふ〔六二〕 蘭學興隆幸
運相接し來る〔六三〕 良澤參り合ふ〔六三〕 良澤の内職談〔六四〕 執刀者〔六四〕
從前の解剖〔六四〕 解剖の結果〔六五〕 大に古說と異〔六五〕 驚天動地の機緣〔六
六〕

一六　解體新書翻譯の著手……六六

頗る奮發さる〔六六〕 三人の述懷〔六七〕 研究相談成る〔六七〕 先人の猛志屬行
〔六八〕 研究開始〔六八〕 研究困難〔六九〕 一日一語〔六九〕 古人の努力〔七〇〕

一七　解體新書成る……七〇
困難想像に難し〔七〇〕フルヘッヘンド〔七一〕くつわ十文字〔七二〕漸次了解〔七二〕されど初志一ならず〔七三〕解體と命名〔七三〕玄白の回顧〔七四〕
註　解體新書以後の著譯〔醫範提綱〕……七五
一八　蘭學社中（一）……七六
社中同人〔七六〕良澤の目的〔七六〕君侯の了解援助〔七七〕雷同者の廢學〔七七〕玄白公平の見〔七八〕中川淳菴〔七八〕嶺春泰鳥山松圓〔七八〕事業と壽命〔七八〕
一九　蘭學社中（二）……七九
桂川甫周〔七九〕甫周の熱心〔八〇〕甫周の著譯〔八〇〕玄白の志〔八一〕單に解體新書の完成にあり〔八一〕玄白の壽命〔八二〕良澤玄白二人の功〔八二〕協同の効果〔八二〕新書公刊の疑惧〔八二〕公認の便宜〔八三〕

第四章　蘭學の大成者……八五

二〇　大槻玄澤（一）……八五
玄澤と諸先輩の年齢〔八五〕玄澤の父〔八五〕建部清庵〔八六〕清庵の先見〔八六〕玄澤玄白の門に入る〔八七〕蘭學の進歩迅速〔八七〕清庵子弟〔八八〕玄澤の天性〔八八〕
註　玄澤鵠齋に學ぶ〔蘭學階梯例言〕……八九
二一　大槻玄澤（二）……八九
遂に良澤に學ぶ〔九〇〕玄澤の進歩〔九〇〕玄澤の改名〔九〇〕長崎遊學〔九一〕江戸ト居〔九一〕玄澤の抱負〔九二〕蘭學者の種類〔九二〕蘭化先生の誡慈〔九三〕鵠齋先生の豁達〔九三〕兩先生の長を學ぶ〔九四〕
二二　蘭學階梯……九四
其の出版〔九四〕其の内容に横文學を加ふ〔九五〕出版の苦心〔九五〕上卷内容〔九六〕下卷内容〔九六〕蘭學志望者の增加〔九六〕是亦た天助の一〔九七〕蘭學者の一般抱負〔九七〕採長補短の志〔九八〕

第五章　平賀源内……一〇〇

二三　物産學と平賀源内（一）……一〇〇
山師の時代〔一〇〇〕　物産學の勃興〔一〇〇〕　田村元雄〔一〇一〕　朝鮮人參の移植〔一〇一〕　物産會を開く〔一〇二〕　平賀源内の年齢〔一〇二〕　源内の立身〔一〇三〕

二四　物産學と平賀源内（二）……一〇四
長崎に赴く〔一〇四〕　歸つて元雄に學ぶ〔一〇四〕　物産會藥品會を開く〔一〇四〕　物類品隲〔一〇五〕　物産採收と本草書述作〔一〇五〕　源内の機敏〔一〇六〕　田沼に取入る〔一〇六〕　兩者の意氣投合〔一〇六〕　高松侯に致仕〔一〇七〕　但し仕官御搆〔一〇八〕
註　源内の物類品隲〔奴師勞之〕……一〇八

二五　平賀源内の致仕……一〇八
致仕の目的〔一〇九〕　田沼に仕へん爲か〔一〇九〕　不平家となる〔一〇九〕　致仕以來著述に擡頭〔一一〇〕　されど依然として種々の工夫〔一一〇〕　電氣機械を作る〔一一一〕　鑛山調査〔一一一〕　源内の死〔一一二〕　玄白作の碑銘〔一一二〕　終生娶らず〔一一三〕　墓碑破毀〔一一三〕　碑文の意〔一一四〕

二六　山師としての平賀源内……一一四
源内の本領〔一一四〕　輸出向陶器製造建白〔一一四〕　在來の天草品〔一一五〕　職人養成〔一一五〕　國利民福の爲め〔一一六〕　見識卓越知るべし〔一一七〕　諸所鑛山調査〔一一七〕　懷中鏡等の製造〔一一八〕　エレキテル器械〔一一八〕　電氣療法〔一一八〕　一種の奇才〔一一九〕

二七　平賀源内と拔荷買……一一九
平賀鳩溪實記〔一一九〕　阿蘭陀物の流行〔一二〇〕　下痢ウルエス〔一二〇〕　密貿易〔一二一〕　源内吉雄へ拔荷買方法を問ふ〔一二一〕　吉雄等の出訴手管〔一二二〕　源内裏を掻く〔一二二〕　吉雄茫然〔一二三〕
註　平賀源内の飛行船〔平賀鳩溪實記〕……一二三

第六章　北方漸く多事……一二五

二八　北方に於ける密貿易と開國（一）……一二五
露國との密貿易〔一二五〕　工藤平助〔一二五〕　赤蝦夷風說考〔一二六〕　平助の經

論〔一二六〕露國公貿易論〔一二六〕一面蝦夷防備〔一二七〕開國國防の第一聲〔一二七〕田沼の開國思想〔一二七〕意知また開國思想〔一二八〕社會の傾向〔一二八〕

二九　北方に於ける密貿易と開國（二）……一二九

久世平九郎の造船計畫〔一二九〕船雛形を送らる〔一三〇〕以て北方貿易調査の趨勢を知る〔一三〇〕露人の貿易請求〔一三〇〕我が拒絶〔一三一〕露人を長崎に廻す〔一三一〕されど實は密貿易〔一三二〕平助知識の源〔一三二〕遂に田沼の耳に達す〔一三三〕平助意見採用〔一三三〕東蝦夷地貿易船〔一三四〕

三〇　鎖國制度に對する內外の脅威……一三四

鎖國制永續せず〔一三四〕鎖國打破の趨勢益盛〔一三四〕海外勢力の接近〔一三五〕英米露の勢力〔一三五〕三勢力漸次接近〔一三六〕最初の接觸者〔一三六〕日本上下の夜驚〔一三七〕平助の意見〔一三七〕公貿易許可にあり〔一三八〕國防第一〔一三八〕

三一　露國始めて日本と接觸す……一三九

突然の出現〔一三九〕露國東侵の始め〔一四〇〕西伯利都市建設〔一四〇〕商人テオドット〔一四〇〕東蔡加半島征服〔一四一〕露領近海探檢〔一四一〕日本近海に至る〔一四二〕アレウト群島發見〔一四二〕

註　俄羅斯交易の始末〔蘐不恤緯並船舶考〕……一四三

三二　日本始めて露國と接觸す……一四四

房州沖の異國船〔一四四〕露人たるを知る〔一四四〕濱方代官へ御觸〔一四五〕露鍵留置代償〔一四五〕下田沖の異船〔一四六〕ゼムリ・アポンスキヤ〔一四七〕日本人莫斯科に至る〔一四七〕聖彼得堡に送らる〔一四七〕露國に歸化〔一四八〕

第七章　露國の對日本野心……一四九

三三　露國女帝と北太平洋……一四九

カザリン二世時代の東方策〔一四九〕黑龍江經營失敗の結果〔一四九〕東方探檢隊續出〔一五〇〕ビリングスの探檢〔一五一〕女帝の眞航海士官養成策〔一五一〕對日本策に集注〔一五二〕

三四　露國に於ける日本語の奬勵……一五三

漂流民竹内傳兵衛〔一五三〕漂流始末〔一五三〕漂流人の子〔一五三〕通辭タラ・ズニコフ〔一五四〕日本語研究の中心地〔一五四〕新藏庄藏〔一五五〕日本語學校の擴張〔一五五〕クラップロートの師〔一五六〕露國の眞意如何〔一五六〕

三五　千島方面に於ける露國の經營……一五七

露人の占守島占領〔一五七〕　第二番島征服〔一五七〕　露人の千島經略進捗〔一五八〕　遂に擇捉を窺ふ〔一五八〕　日本人の最初に知得せし事〔一五八〕　蝦夷と赤人の爭〔一五九〕　蝦夷赤化〔一五九〕　飜虎島赤人渡來〔一六〇〕　ウルップ島の爭〔一六〇〕　ウルップ爭の一說〔一六一〕　露人の手段々として伸ぶ〔一六一〕

註　ウルップ島の事〔蝦夷草紙〕……一六一

三六　露國頻りに我が北邊を窺ふ……一六二

露人根室に來る〔一六三〕　吏人面談〔一六三〕　交易を請ふ〔一六三〕　翌年再來〔一六四〕　吏人交易謝絕〔一六五〕　安永八年の交易〔一六五〕　天明三年露船漂著〔一六五〕　露人擇捉島滯留〔一六六〕　露船津輕海峽に來る〔一六六〕　北邊多事〔一六六〕

三七　日本に對する露國の野心の風說……一六七

露國女帝の日本侵略說〔一六七〕　只通商を求むる爲か〔一六七〕　否然らず〔一六八〕　ペニヨーヴスキー〔一六八〕　ペの佛國政府建言〔一六八〕　シェレルの佛國政府報告〔一六八〕　英佛共に露に注意〔一六九〕　英國の北太平洋探檢計畫〔一六九〕　英露の日本侵略說〔一七〇〕　佛の英露阻止策〔一七〇〕

三八　所謂るハンベンゴロ……一七一

佛國憂慮亦當然〔一七一〕　事實歷々〔一七一〕　ペの密告〔一七二〕　密告本文〔一七二〕　ペの日本交易意見〔一七三〕　ハンベンゴロ〔一七四〕　加模西葛杜加記所載〔一七四〕　邊要分界圖考所記〔一七五〕　事實其儘報告〔一七六〕

註　ハンベンゴロの密訴〔狄錄事略〕……一七六

第八章　中央と地方……一七八

三九　封建制度の功德（一）……一七八

紀綱紊亂の極〔一七八〕　德川氏の封建組織〔一七八〕　全くの中央集權〔一七九〕　諸大名の自治權〔一七九〕　列藩相互牽制策〔一八〇〕　直轄都市の自治權〔一八〇〕　各特殊の風を生ず〔一八一〕　中央の腐敗全國に及ぼす〔一八一〕

四〇　封建制度の功德（二）……一八二
地方は猶剛健〔一八二〕宛然不震番設置の如し〔一八二〕其實一種の各藩自治〔一八三〕勝手の改易を得ず〔一八三〕但し相對的地方健全〔一八四〕鎖國單調を破れる割據〔一八四〕割據各個の性格を作る〔一八五〕割據缺點補足〔一八五〕

四一　才能出身の方便……一八六
明君は何れも養子〔一八六〕養子多くは賢〔一八六〕德川十五代中の明君〔一八六〕小身者拔擢〔一八七〕世祿者立身亦下流よりす〔一八七〕脇坂淡路守〔一八八〕贈賄亦た立身手段〔一八八〕贈賄の二種〔一八九〕賄路專門は不可〔一八九〕
註　守宮黑燒の時世（甲子夜話）……一九〇

第九章　肥後藩の財政刷新……一九一

四二　細川重賢の襲封……一九一
襲封理由〔一九一〕兄宗孝刺さる〔一九一〕人違ひの被害〔一九一〕被害後の措置〔一九二〕大御所吉宗機宜の處置〔一九二〕幕使存問〔一九三〕重賢襲封〔一九三〕重賢部屋住時代の生活〔一九四〕羽織の質入〔一九四〕

四三　一藩の財政窮迫……一九五
細川氏の財政困難〔一九五〕重賢の初入國〔一九五〕重賢自筆の訓諭〔一九六〕第一言路洞開〔一九六〕第二諸士困窮救濟〔一九七〕第三家作屋敷廻文武の注意〔一九七〕目附横目役への訓告〔一九八〕結語〔一九八〕根本的困難〔一九八〕江戸參勤に就き勝手方訓諭〔一九九〕

四四　財政窮迫の現狀……二〇〇
扶持方滯り勝〔二〇〇〕不渡十七年間〔二〇一〕山田友賀の出奔計畫〔二〇一〕重賢の位置の困難〔二〇一〕借金も成らず〔二〇一〕鴻池家の藏本斷り〔二〇二〕皆鴻池に傚ふ〔二〇二〕長田作兵衛〔二〇三〕作兵衛の御用請合〔二〇三〕漸く活路を得〔二〇三〕

四五　細川重賢と堀勝名……二〇四
財政立直り〔二〇四〕重賢の精根〔二〇四〕勵精寢を忘る〔二〇五〕賢臣堀勝名〔二〇六〕漸次拔擢〔二〇六〕勝名の偉才〔二〇六〕稀なる君臣際會〔二〇七〕
註　重賢松平康致に書を與へて施政の要を說く（甲子夜話）……二〇八

四六　改革の就緒……二〇九
勝名登用に至る徑路〔二〇九〕　竹原玄路と問答〔二一〇〕　玄路勝名を薦む〔二一〇〕　不審を糺す〔二一一〕　勝名行狀記〔二一一〕　勝名政道〔二一二〕　改革要領〔二一二〕　財政切廻し〔二一三〕

四七　商機と政機……二一四
財政全く立直り〔二一四〕　立直り原因〔二一四〕　勝名商機を觀る〔二一四〕　勝名樂屋向の顯はれ〔二一五〕　勝名方出入者〔二一六〕　出入者の種々〔二一六〕　勝名の眼光〔二一七〕

第十章　細川重賢の庶政一新……二一八

四八　質素儉約一藩を風化す……二一八
節儉心服〔二一八〕　儉約令〔二一八〕　自ら儉約の實行〔二二〇〕　飲食贈答の訓諭〔二二〇〕　重賢自身の食事〔二二一〕　浴室の麁末〔二二二〕　疊替もせず〔二二二〕

四九　風化の實證……二二三
肥後藩質實剛健の風〔二二三〕　龜井道載の感歎〔二二三〕　儒者の風俗〔二二四〕　酒食の簡單〔二二五〕　他國酒の禁止〔二二五〕　是れ事實の直叙〔二二五〕　蒲池の屑衣〔二二六〕　正月尙ほ綿服〔二二六〕

五〇　利用厚生に關する積極的施設……二二七
殖産興業〔二二七〕　櫨方〔二二七〕　御郡間會計〔二二七〕　二種の特別會計〔二二八〕　植木業〔二二八〕　蠶織奬勵〔二二九〕　島巳兮の宣傳〔二二九〕　中央に反して春色胎蕩〔二三〇〕
註　細川重賢阿蘇山の硫黄を採取（落栗物語）……二三〇

五一　教學の興隆……二三二
學校設立〔二三二〕　秀才養成〔二三二〕　君侯の學校視察〔二三三〕　講堂建增し〔二三三〕　三八日の講經〔二三三〕　教授秋山儀右衞門〔二三四〕　君侯自ら試驗〔二三四〕　受賞者年々增加〔二三四〕　寧ろ徹底し過ぐ〔二三五〕　議論倒れの徵〔二三五〕

五二　民政の振作……二三六

民生幸福に留念〔二三六〕　土地檢定〔二三六〕　小民救濟方法〔二三七〕　貧富兩民の喜び〔二三八〕　郡代政治〔二三八〕　租稅輕減〔二三九〕　納租時期の繰上〔二三九〕　人民鼓腹殿樣祭りをなす〔二三九〕　備荒儲蓄〔二三九〕
註　重賢四人を用ひて產業を起す（落栗物語）……二四〇

第十一章　德川治貞……二四一

五三　紀州に麒麟肥後に鳳凰……二四一
地方分權制の賜物〔二四一〕　安永江戸市騷〔二四二〕　德川治貞の出生〔二四二〕　西條藩の治績〔二四二〕　紀平洲を聘す〔二四三〕　宗藩相續〔二四三〕　老臣の意見を徵す〔二四三〕　最初の儉約令〔二四三〕　御救御貸方〔二四四〕　老練なる政事家〔二四四〕

五四　明君としての德川治貞……二四五
身を以て衆を救ふ〔二四五〕　五愼敎戒〔二四六〕　物に凝らぬこと〔二四六〕　是れ緊要訓言〔二四六〕　諫言のこと〔二四六〕　美服のこと〔二四七〕　飲食の事〔二四七〕　藝能の事〔二四八〕　所謂る大名藝〔二四八〕　田沼に諂はず〔二四八〕　肥後と相違〔二四九〕

五五　德川治貞と敎化……二五〇
紀藩の學校〔二五〇〕　學校再興の意志〔二五〇〕　遂に學校無し〔二五一〕　されど學事奬勵〔二五一〕　自ら講釋を聽く〔二五二〕　其學偏せず〔二五二〕　佛學まで學ぶ〔二五三〕　儉約の仕方〔二五三〕
註　德川治貞の仁惠（落栗物語）……二五四

第十二章　上杉治憲と其の藩政(一)……二五六

五六　上杉治憲……二五六
治憲の出生〔二五六〕　治憲の生涯〔二五六〕　治憲の時代と田沼の時代〔二五七〕　治憲退隱理由〔二五七〕　治憲治國の志〔二五八〕　春日社奉納の誓文〔二五八〕　誓文久しく知られず〔二五九〕　上杉家財政困難の原因〔二五九〕　白子社奉納誓文〔二六〇〕　君臣同盟の誓文〔二六〇〕　色部照長誓文〔二六一〕

五七　上杉治憲の在府在藩の諸士への告諭(一)……二六二

儉約訓諭〔二六二〕　其大旨〔二六二〕　財政困難〔二六二〕　決心〔二六三〕　將來立行くべき爲〔二六三〕　身邊儉約條々〔二六四〕　在藩諸老臣に告ぐ〔二六四〕　志記冒頭〔二六四〕　年少藩主十分の了見〔二六五〕

五八　上杉治憲の在府在藩の諸士への告諭(二)……二六五

迷惑は一時、詰りは安堵〔二六六〕　適切の例〔二六六〕　米澤へも申知らす〔二六六〕　人民不覺なき樣〔二六六〕　人民覺悟〔二六七〕　君侯自らの心〔二六七〕　自身發意の力說〔二六七〕　懇談的の依頼〔二六八〕　若年襲封の爲か〔二六八〕　赤願人民安堵のみ〔二六九〕　支藩主勝承の共鳴〔二六九〕

註　献上物は輕きがよし〔翹楚篇〕……二七〇

五九　上杉治憲對在藩の諸老臣……二七一

在米澤老臣の不承〔二七一〕　改めて直書を與ふ〔二七二〕　郷重懇請〔二七三〕　老臣尙ほ不承〔二七三〕　前主重定の出馬〔二七三〕　老臣近臣の動搖〔二七四〕　治憲股肱の重臣〔二七四〕

六〇　藁科貞祐の書簡……二七五

事情を盡せる書狀〔二七五〕　秋津洲一統の奢り〔二七六〕　主樣の仕事〔二七六〕

普通以上の大名生活か〔二七七〕　君侯節儉〔二七七〕　諸大臣の職責〔二七七〕　當時の腹立氣持〔二七八〕　一揆徒黨の騷ぎ〔二七八〕　時運の看取者〔二七九〕　各人其節を守るの要〔二七九〕

六一　最初の入部……二八〇

色部荏戸の擢用〔二八〇〕　普請手傳を命ぜらる〔二八〇〕　是に就き國内への觸れ〔二八〇〕　銘々出金〔二八一〕　初入部と馬廻、五十騎組葛藤〔二八一〕　治憲の諭諭〔二八二〕　四十年目にて起れる葛藤〔二八三〕　木曾山檜の書〔二八三〕　漸く解決〔二八四〕　馬廻後勤〔二八四〕

六二　治憲と紀平洲……二八五

平洲の人物〔二八五〕　平洲米澤に聘せらる〔二八五〕　神保綱忠〔二八六〕　藁科貞祐の勳功〔二八六〕　貞祐辭世〔二八六〕　平洲貞祐の墓を訪ふ〔二八七〕　治憲第一善政嬰兒生育〔二八七〕　郡奉行任命〔二八八〕　江戸邸の燒亡〔二八八〕　平洲江戸に還る〔二八九〕

六三　著々治化を擧ぐ……二八九

一難更に加はり新奇賦課〔二九〇〕　諸士への褒詞〔二九〇〕　時宜に從ふこと〔二九〇〕　木材伐出〔二九一〕　荏戸竹俣益々重用〔二九二〕　郷村教導出役〔二九二〕

勤方心得亂達〔二九三〕　廻村横目〔二九四〕
註　治憲の武事勸奬〔翹楚篇〕……二九五

第十三章　上杉治憲と其の藩政(二)……二九六

六四　七老臣治憲を强要す……二九六
舊門閥連反抗〔二九六〕　須田滿主の反抗〔二九六〕　七老臣連署上書〔二九七〕　微頭徹尾治憲彈劾〔二九七〕　正系にあらず〔二九七〕　國中皆從はず〔二九七〕　年々惡事のみ〔二九八〕　長大の寸尺選ひ〔二九八〕　今後の處置願條々〔二九九〕　竹俣等排斥〔二九九〕　二者共一を請ふ〔三〇〇〕　理由無用決定專要〔三〇〇〕
六五　强要の結果……三〇一
老臣肉薄〔三〇一〕　治憲重定に申告〔三〇二〕　重定一喝老臣を退く〔三〇二〕　政務停滯〔三〇三〕　治憲和協を諭せど肯かず〔三〇三〕　監察等に諮問〔三〇三〕　七老臣處罰決定〔三〇四〕　戒厳令を布く〔三〇四〕　竹俣等入城〔三〇四〕　出勤差控者皆許さる〔三〇五〕
六六　七老臣の處分……三〇六
竹俣在戸と治憲情意疏通か〔三〇六〕　城中戰場の如し〔三〇六〕　七人に登城を命ず〔三〇七〕　七人各別拘留而して治憲言渡し〔三〇七〕　千坂色部の所罰〔三〇八〕　須田芋川切腹申渡〔三〇八〕　長尾等に言渡〔三〇八〕　其他の處分〔三〇九〕　處分顚末報告〔三〇九〕　藁科立澤處分〔三一〇〕　立澤の須田教唆〔三一〇〕
六七　執政竹俣當綱の施設……三一一
治憲の威望加はる〔三一一〕　殖産興業〔三一一〕　當綱の施政意見〔三一二〕　樹藝役場設置〔三一二〕　財政遺繰策〔三一三〕　縮布製造〔三一四〕　藍作奬勵〔三一四〕
註　鷹山君臣の勵精〔武家七德後編〕……三一四
六八　學政振興……三一六
學館再興〔三一六〕　學館再興次第〔三一六〕　學館組織〔三一六〕　學則大要〔三一七〕　平洲再來〔三一八〕　諸規則制定〔三一八〕　禁酒〔三一八〕　學風根本義〔三一九〕
六九　竹俣當綱……三二〇

致仕申出〔三二〇〕 懇諭留任〔三二〇〕 再致仕申出で再留任〔三二一〕 芋川邸押込〔三二一〕 治憲當綱を龍めんとす〔三二一〕 莅戸善政に諮る〔三二二〕 善政米澤に當綱を召す〔三二二〕 押込命令傳達〔三二三〕 當綱嚴譴の理由〔三二四〕

七〇　上杉治憲人君の心得……三二四

東北饑饉〔三二四〕 米澤窮乏を免る〔三二五〕 新に備荒貯蓄〔三二五〕 治憲隱居〔三二六〕 治憲教訓三條〔三二六〕 治憲田沼時代と始終〔三二七〕 自治權の爲の其政〔三二八〕 封建制亦謳歌すべし〔三二八〕

註　治憲の勵精（餘韻附尾）……三二九

第十四章　毛利重就と其藩政……三三〇

七一　毛利氏の財政……三三〇

重賢治憲等の感化〔三三〇〕 更に感化大なる毛利重就〔三三〇〕 關原役の打擊〔三三〇〕 既得物成返償〔三三一〕 益田元祥の遺繰〔三三一〕 公稱石高決定〔三三二〕 元和末年の窮乏〔三三二〕 財政其礎漸く定まる〔三三二〕 聽走米賦課〔三三三〕 正德の仕組〔三三三〕 延享寶曆の仕組〔三三四〕

七二　毛利重就の襲封……三三四

重就亦た奚子〔三三四〕 財政整理著手〔三三五〕 聽走半減〔三三六〕 已むなく半知制復舊〔三三六〕 恒に歲計不足〔三三六〕 新田開墾〔三三七〕 步戾開作〔三三七〕 重なる財源〔三三八〕

七三　毛利重就藩政刷新の端緒……三三八

重臣の驕慢を抑ふ〔三三八〕 記錄所役を設く〔三三九〕 坂時存の財政意見〔三三九〕 明年所務皆無〔三四〇〕 貯金空乏〔三四〇〕 貯穀亦た空乏〔三四〇〕 耕地荒廢〔三四〇〕 良港創設〔三四一〕 歲入增加法〔三四一〕 歲出節制策〔三四一〕 著々實行〔三四二〕

七四　重就愈々改革に著手す（一）……三四二

御前仕組方設置〔三四二〕 重就新誓〔三四三〕 重就訓令十條〔三四三〕 協議を求む〔三四四〕 浮說謗議に迷はぬ事〔三四五〕 沙汰愼重を要す〔三四五〕 格式を重んずべき事〔三四六〕

七五　重就愈々改革に著手す（二）……三四七

格式祭重理由〔三四七〕　人材登用心得〔三四七〕　陪臣横暴制肘注意〔三四八〕　政事得失評議〔三四八〕　職座一存に任す〔三四九〕　重就見識〔三四九〕　一門戒諭〔三五〇〕　諫言寛容〔三五〇〕　政務心付申出の事〔三五〇〕　總て道理に從ふべし〔三五一〕　文武怠惰の事〔三五一〕　役人整理〔三五一〕　表裏洞徹〔三五二〕

註　毛利重就の教育（防長回天史）……三五二

七六　撫育局の新設……三五三

土地廣狹秤〔三五三〕　負擔均一法〔三五四〕　檢地著手〔三五四〕　六萬石の剩餘を得〔三五五〕　正味四萬石を剩す〔三五五〕　撫育局成る〔三五六〕　支出は藩主直接命令〔三五六〕　大に殖産を謀る〔三五六〕　御馳走開作〔三五七〕

七七　撫育局の成功……三五七

重なる効果〔三五七〕　用心米〔三五九〕　目的以上の効果〔三五九〕　重就の高祖祭文〔三六〇〕　一藩感悦〔三六〇〕　重就子孫訓誡を貽す〔三六一〕　退隠中の事業〔三六二〕

第十五章　幕府財政の遺繰……三六三

七八　幕府の儉約令（一）……三六三

地方の剛健〔三六三〕　幕府財政の困難〔三六三〕　幕府の切拔四策〔三六四〕　入用引締令〔三六四〕　内々渡物〔三六五〕　品物買入方〔三六六〕

七九　幕府の儉約令（二）……三六七

明和八年儉約令〔三六七〕　拜借差許されず〔三六七〕　内外一切緊縮〔三六八〕　道中來行沙汰〔三六八〕　臺所料理まで儉約〔三六八〕　諸入用一切〔三六九〕　筆墨紙儉約〔三六九〕　城中疊取繕無用〔三六九〕　されど殆ど徒法〔三七〇〕

註　天明三年の儉約令（天明集成絲綸錄）……三七一

八〇　儉約令と社會……三七一

儉約令茶化さる〔三七一〕　けち女來公落書〔三七二〕　儉約ちよぼくれ〔三七三〕　擬觸書〔三七四〕　布衣以上女郎買仕方〔三七四〕　布衣以下仕方〔三七五〕　船賀無用〔三七五〕　衣服之事〔三七五〕　足袋の事〔三七六〕　褌の事〔三七六〕　結髮の事〔三七六〕　多棄粉入の事〔三七六〕　諸事かすりある樣〔三七七〕　最も皮肉〔三七七〕何れが不眞面目〔三七七〕

八一　新貨鑄造……三七八

明和二年貨幣新鑄令〔三七八〕　明和四年の發令〔三七八〕　公定價格を附す〔三七九〕　眞鍮錢鑄造〔三七九〕　錢價下落〔三七九〕　四文錢落首〔三八〇〕　南鐐二朱新鑄〔三八〇〕　法の力にても行ひ得ず〔三八一〕

八二　下駄屋甚兵衞の上書……三二一

世上迷惑〔三八二〕　上書本文〔三八二〕　金相場下落〔三八三〕　陰盛にして陽衰ふ〔三八三〕　四文錢波形〔三八三〕　二朱銀七星〔三八四〕　江戸米不足の理由〔三八四〕　大阪より米積下らず〔三八五〕　世上一統困難〔三八五〕　神佛の加護薄し〔三八五〕　半知は開えず〔三八六〕　祈禱請願〔三八六〕　金銀直違ひ〔三八六〕　兩替之損〔三八七〕　世間の態度知るべし〔三八八〕

八三　運上政策……三八八

改鑄新鑄の害〔三八八〕　運上〔三八八〕　冥加金〔二八九〕　株式冥加〔三八九〕　課稅の失敗〔三八九〕　絹糸眞綿改所設置令〔三八九〕　改科取立〔三九〇〕　大店の仕入差控へ〔三九一〕

八四　運上政策と百姓騒動……三九二

人民爆發〔三九二〕　高崎城下へ愁訴〔三九二〕　城兵發砲〔三九三〕　改所撤廢〔三九三〕　百姓騒動に付發令〔三九四〕　盜品賣捌取締令〔三九四〕　萬石以下への注意〔三九五〕　押込强盜誘起〔三九五〕

註　絹運上騒動〔後見草〕……三九六

第十六章　各種事業の官營……三九八

八五　銅山及び銅座……三九八

專賣政策〔三九八〕　銅山採掘令〔三九八〕　佐竹領銅山を取上ぐ〔三九九〕　銅座開設〔四〇〇〕　問屋廻しも可〔四〇〇〕　長崎直送亦た可〔四〇一〕　圍銅賣銅禁止〔四〇一〕　積出銅員數屆出〔四〇一〕　一切銅座より賣出〔四〇二〕

八六　銀座、鐵座、眞鍮座……四〇二

鑛山發掘願の觸〔四〇二〕　銀專賣〔四〇三〕　銀專賣厲行〔四〇四〕　銀箔に就き〔四〇四〕　諸方鑛山試掘〔四〇四〕　鐵座眞鍮座を設く〔四〇五〕　鐵荷物大坂著手續〔四〇五〕　其所限使用の鐵〔四〇六〕　眞鍮吹立〔四〇六〕　細工方へ賣渡次第〔四〇六〕　鐵眞鍮改座期日〔四〇七〕　一切專賣〔四〇七〕

八七　朱、人參、龍腦、明礬の專賣……四〇八
朱座專賣厲行〔四〇八〕　天明二年再令〔四〇八〕　田村元雄〔四〇九〕　人參座設置〔四〇九〕　御製法人參の効能〔四一〇〕　龍腦座を設く〔四一〇〕　明礬會所〔四一一〕
註　田村藍水〔皇國名醫傳後編〕……四一二

八八　石灰と油の專賣……四一二
石灰專賣〔四一二〕　硫黃專賣〔四一三〕　燈油一手販賣〔四一三〕　明和三年再令〔四一四〕　綿實賣方〔四一四〕　明和七年緩和令〔四一五〕　絞草綿實買入方〔四一五〕　自家用製油許可〔四一六〕　背令者の咎〔四一六〕　綿實賣買〔四一七〕　內密賣買の禁〔四一七〕　問屋仲買多數許可〔四一七〕

八九　貸附會所の失敗……四一八
金銀融通政策〔四一八〕　出金仰出〔四一八〕　貸附會所設置〔四一九〕　出金銀納方〔四一九〕　出金銀期日〔四二〇〕　百姓町人の迷惑〔四二一〕　幕府の利鞘取政策の失敗〔四二一〕　出金中止〔四二一〕

九〇　印旛沼手賀沼の開鑿……四二二
最も顯著の事〔四二二〕　享保度の開鑿失敗〔四二二〕　安永度の計畫〔四二三〕　其の目論見〔四二三〕　實地檢分〔四二三〕　洪水の被害〔四二四〕　工事中止〔四二五〕　新田開疏〔四二五〕　開門を設く〔四二五〕　堤防開門皆な破壞〔四二六〕　あながち田沼失策に非ず〔四二六〕

九一　北地開拓の計企……四二七
田沼密貿易に關與か〔四二七〕　勘定奉行松本の蝦夷見積り〔四二七〕　可行的意見〔四二八〕　特殊部落人移殖策〔四二八〕　永遠の策〔四二九〕　移殖年月〔四三〇〕　田沼の許可〔四三〇〕　されど中止〔四三〇〕
註　松前藩の米穀試作〔松前志〕……四三〇

九二　金銀の輸入……四三二
田沼財政遣繰仮備〔四三二〕　田沼白石の論を罵倒〔四三二〕　海外寶貨取入策〔四三三〕　俵物製造奬勵〔四三三〕　唐人向仕立稼方奬勵〔四三三〕　献上餘分亦賣渡すべし〔四三四〕　俵物輸出數量〔四三四〕　賣上價額〔四三五〕　輸入金銀數量〔四三五〕

第十七章　頽蕩氣分の横溢……四三七

九三　旗本風儀の頽廢……四三七

糜爛其極に至る〔四三七〕　淫風增長〔四三七〕　腰物の華奢〔四二八〕　饗應の贅澤〔四三八〕　縛禮〔四三九〕　菓子問題となる〔四四〇〕　遂に謝罪〔四四〇〕　世の變遷〔四四一〕

九四　番頭共寄合の亂暴……四四一

腐敗の一例〔四四一〕　藝者寄合〔四四一〕　大久保持參の菓子〔四四二〕　大久保等の亂暴〔四四三〕　器具破壞〔四四三〕　脫糞放尿〔四四三〕　狼藉物處分〔四四四〕

註　博奕巾着切の横行〔後見草〕……四四五

九五　淫蕩の風俗……四四六

自然の助長〔四四六〕　三味線の流行〔四四七〕　女藝者の流行〔四四七〕　隱賣女〔四四七〕　下駄屋甚兵衛上書〔四四八〕　町々惡風感染〔四四八〕　中洲の繁昌〔四四九〕　賣女公認の觀〔四四九〕　淫蕩放逸の極〔四五〇〕

九六　京都に於ける役人の私曲……四五一

牧時大家の續出〔四五一〕　時計流行の原因〔四五一〕　京役人亦同樣〔四五一〕　禁裡時方文書僞造一件〔四五二〕　檢舉著手〔四五二〕　幕府の斷乎處分〔四五二〕　斬首追放流刑人數〔四五三〕　從來禁中御物入常に不足〔四五三〕　所司代訓令〔四五四〕

第十八章　人災と天災……四五六

九七　關東に於ける百姓一揆……四五六

直接行道の流行〔四五六〕　明和元年上武百姓一揆〔四五六〕　其の原因〔四五六〕　人馬强徵發〔四五七〕　百姓嘯集〔四五七〕　熊谷宿襲擊〔四五七〕　伊奈半左の鎭撫〔四五八〕　比企入間郡を荒らす〔四五八〕　川越在に入る〔四五九〕　暴徒多くは川越領民〔四五九〕　狐塚襲擊〔四五九〕　終熄〔四六〇〕

九八　百姓の騷擾と幕府の制令……四六一

幕府の騷擾鎭壓令〔四六一〕　更に强硬鎭壓令〔四六一〕　穩便取鎭の弊〔四六二〕

強硬手段亦止むを得ず〔四六三〕　徒黨强訴一切不採用〔四六三〕　三卿領知内の取扱方〔四六四〕　是三家よりの依頼〔四六四〕　徒黨强訴人捉〔四六四〕　徒黨不參加村役人褒賞定〔四六五〕　源を杜がす〔四六六〕

九九　米騒動……四六六

天明七年米騒動〔四六六〕　先づ大阪に起る〔四六七〕　江戸米價の騰貴〔四六七〕江戸暴民起る〔四六八〕　諸所暴行〔四六八〕　餘勢市外に及ぶ〔四六九〕　暴行直接原因〔四六九〕　暴民の種類〔四六九〕　話よりも大きな騒ぎ〔四七〇〕

註　江戸のうちこはし〔蜘蛛の糸卷〕……四七〇

一〇〇　天災地禍……四七二

諸國大旱〔四七二〕　江戸行人坂大火事〔四七二〕　翌日再發火〔四七三〕　燒亡損失〔四七三〕　諸國旱水風損〔四七四〕　疫病流行〔四七五〕　淺間山大噴火〔四七五〕被害劇甚〔四七五〕　損害死亡〔四七六〕

一〇一　饑饉、疫癘及び其の救方……四七七

東北大饑饉〔四七七〕　死人の肉を食ふ〔四七七〕　一村皆死せるあり〔四七八〕　凄慘目も當てられず〔四七八〕　疫癘流行と救療方〔四七九〕　米賣惜禁止令〔四七九〕

第十九章　田沼時代の終焉……四八一

一〇二　田沼意知殿中に斬らる……四八一

滿つれば缺くる世の習〔四八一〕　意知斬らる〔四八一〕　意知死す〔四八二〕　加害者切腹〔四八二〕　兇行原因〔四八二〕　田沼の振舞傍若無人〔四八三〕　金を捻上げらる〔四八三〕　狩獵の功を奪はる〔四八四　止むなく兇行〔四八四〕

一〇三　田沼沒落の第一歩……四八四

佐野刄傷影響〔四八五〕　所謂佐野書置十七條〔四八五〕　水野家奪取〔四八五〕　似金作り〔四八六〕　本家系圖借取〔四八七〕　武功の家を誤る〔四八八〕　是れ一種の假託〔四八九〕　佐野神とせらる〔四八九〕　佐野の墓參者多し〔四八九〕

註　自及仇を斬る〔蜘蛛の糸卷〕……四九〇

一〇四　田沼と世間……四九一

意知葬儀〔四九一〕　路人投石〔四九一〕　乞食の惡戯〔四九一〕　流行黃表紙〔四九二〕　七眼小藏〔四九二〕　羅馬字の落首〔四九三〕　其他の落首〔四九五〕　されど

田沼反省せず〔四九五〕

一〇五　田沼勢力凋落の象徴……四九六

衆怨意次一人に集まる〔四九六〕　意次將軍に世事を知らさず〔四九七〕　山村良旺退けらる〔四九七〕　松平定信出づ〔四九七〕　田沼の油斷〔四九八〕　田沼方小堀政方罷免〔四九九〕　其の原因〔四九九〕　義民文殊屋九助〔五〇〇〕　田沼勢力凋落の徴〔五〇〇〕

一〇六　田沼意次の失脚……五〇〇

定信久しく意次を狙ふ〔五〇〇〕　意次罷免直接原因〔五〇一〕　家治病氣〔五〇一〕　家治病氣益々漸む〔五〇二〕　田沼施設漸次中止〔五〇三〕　意次罷免〔五〇三〕　意次目論見失敗〔五〇四〕　實際の意次罷免者〔五〇四〕

一〇七　田沼意次の罪案(一)……五〇五

將軍病氣と意次罷免關係〔五〇五〕　擬作罪案二十六條〔五〇五〕　君主を愚にす〔五〇六〕　親族のみ登用〔五〇六〕　吝嗇仕方〔五〇七〕　火消屋敷の破損〔五〇八〕　伊勢神宮傳通院破損〔五〇八〕　右の要略〔五〇九〕

一〇八　田沼意次の罪案(二)……五〇九

田沼住所の華美〔五一〇〕　一族家臣の驕奢〔五一〇〕　賄賂にて官位取持〔五一一〕　峰岡牧場荒廢〔五一一〕　御貸付金の不都合〔五一二〕　貸付金姦曲〔五一二〕　金座者帶力の事〔五一二〕　百姓帶刀濫授〔五一二〕　賄賂にて帶刀取持〔五一三〕　殿中熨斗目著用〔五一三〕　浪錢の事〔五一三〕　南鐐銀の事〔五一四〕　新鑄錢の粗惡〔五一四〕　一切賄賂〔五一四〕

一〇九　田沼意次の罪案(三)……五一五

賄賂にて張出普請許可〔五一五〕　火除地拜領許可〔五一五〕　藏米火除地賣出〔五一五〕　大切國々等閑〔五一六〕　鐵座紊亂〔五一六〕　訴訟偏頗〔五一六〕　家來の無法〔五一六〕　不學醫師登用〔五一七〕　采地を膏腴田と取替〔五一七〕　物產買上役所〔五一七〕　諸役人皆金銀私慾〔五一八〕　賄賂一生始終〔五一九〕

一一〇　田沼意次の懲罰……五一九

意次宣告〔五一九〕　松本秀持宣告〔五二〇〕　家人に家具盜まる〔五二一〕　田沼の勢威家臣に及ぶ〔五二二〕　世人の失脚讃迎〔五二二〕　田沼氏改易〔五二三〕　收獄財貨ほゝ吐出〔五二三〕

註　相良城破却の時の有様（甲子夜話）……五二四
二　田沼時代の縮圖……五二五
積惡の報（五二五）　最後懲罰の原因（五二五）　當時の落首（五二六）　ちよぼくれ（五二六）　大老成りそこれ（五二六）　人主取入名人（五二七）　便宜主義者（五二八）　濁流に游ぐ怪魚（五二八）　文字もての縮圖（五二九）
年表及人物概覽
其一　年表……一一—一二
其二　人物概覽……一三—四三
索引……一一四

挿入繪圖

一　上杉治憲畫像……卷首
一　田沼意次畫像（二）田沼意次の官歴）……五
一　杉田玄白畫像（一一）杉田玄白（一）……四四
一　大槻玄澤畫像（二〇）大槻玄澤（一）……八五
一　細川重賢筆蹟（四二）細川重賢の襲封）……一九一
一　毛利重就筆蹟（四二）細川重賢の襲封）……一九一
一　上杉治憲筆蹟（七〇）上杉治憲人君の心得）……三二六
一　天明三年淺間山噴火圖（天災地禍（一〇〇））……四十五

近世日本國民史

田沼時代

蘇峰學人

第壹章　田沼時代概觀

【一】幕政の降り阪

大正十四年二月十四日、大森山王草堂に於て、田沼時代を書き始む。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

家重の不肖

八代將軍吉宗は、少くとも中興の主であつた。彼は幕府の頽勢を喰ひ止め、而して幾許か其の威信を恢復し、其の紀綱を立て直した。然も彼の長子家重は、

不肖の子であつた。若し其の二男田安宗武が、吉宗の相續者となり、九代將軍となつたならば、或は吉宗の政治を恢宏にせざる迄も、其の遺業を繼紹したであらう。されど家重は、政治には殆んど何等の興味なく、只だ肉慾にのみ耽つた。彼が淫縱は、彼をして中風を煩はしめ、やがて言語不明瞭となり、之を解する者は、其の暱近者大岡忠光のみであつた。〔參照　寶曆明和篇六、七〕家重は延享二年に、吉宗の職を襲いだ。然も寶曆元年六月二十日、吉宗が六十八歳にて、西の丸にて薨ずる迄は、彼は吉宗後見の下にあつた。されば寶曆初年迄は、先づ吉宗政治の延長と見る可きであらう。而して寶曆十年五月に、家重は其職を子家治に讓り、十一年六月二日五十一歳にて、二の丸に薨じた。故に正味家重の時代は、先づ寶曆元年より同十一年に至る、約十一個年だ。

正味家重の時代

大岡と田沼

多病の彼は自から政を見ることなく、多くは側衆大岡忠光、及び田沼意次を透して、其の執政者と應接した。而して彼の大岡忠光を寵用したのは、既記の通りだ。〔參照　寶曆明和篇六、七〕

賄賂的献替者無し

德川幕府の上期に於ては、家光時代の酒井忠勝、家綱時代の酒井忠淸、綱吉初政の堀田正俊の如き、或者は重臣と云ひ、或者は權臣と云ふ可き者があつた。されど綱吉以降は、綱吉時代の柳澤吉保、家宣、家繼時代の間部詮房の如きは、其の近習出身にして、將軍の信寵を得、威福を中外に逞うしたれども、何れも將軍の旨を承け、將軍に迎合して然りしものにして、政治上に何等積極的の献替を爲したるとは、皆無と云はざる迄も、稀少であつた。而して詮房の如きは、寧ろ新井白石の、意見の執行機關とも云ふ可き者であつた。乃ち彼は白石に吹き込れ、その意見を取り次ぎ、若しくは取り行うたに過ぎなかつた。

御用取次役權勢を得

其の家繼時代に於ては、將軍が幼稚であつたから、猶更であつた。

吉宗に至りては、彼自から彼の宰相であつた。固より水野忠之、松平乘邑の如き、能臣は有つた。されど其の政治は、寧ろ吉宗の親裁に出で。其命を、兩側衆、卽ち彼が紀州邸より伴ひ來りたる有馬兵庫頭氏倫、加納遠江守久通が取り次いだ。此の如くして御側御用取次の役は、頗る權勢あるものとなつて來た。

大岡忠光の立身

家重に至りては、其の政治は專ら堀田正亮、西尾忠尚、松平武元等の手にあつた。〔參照　寶曆明和篇六、七〕而して其の將軍と執政者の中介者は、實に大岡忠光であつた。〔參照　同上〕忠光は享保九年八月、家重西丸に在るの際小姓となり、元文二年十二月には小姓頭取に進み、四年五月御用取次見習を命ぜられ、延享二年家重に從て本丸に移り、小姓組番頭の格に昇り、三年十月側衆となり、御用取次元の如く、屢ば祿を加へ、寶曆元年十二月、萬石の列に入り、遂ひに大名となつた。三月若年寄となり、奥勤元の如く、六年五月側用人に轉じ、更らに地を增して、武州岩槻二萬石の城主となつた。而して彼は寶曆十年四月二十七日、五十二歳にて逝いた。家重が綱吉程の偉物でなき如く、彼れ亦た柳澤程の權數もなく、只だ一生謹愼にして、將軍に迎合し、謙遜にして、他の憎みを受けなかつた。而して彼と殆んど同樣の出身者にして、彼以上の働きをなし、世間に所謂る田沼時代なる、一時代を劃するに至りたる田沼意次は、とても彼と同日に論ず可き代物ではなかつた。要するに此の時代は、幕政の降り阪

田沼意次畫像（東京　勝林寺所藏）

である。

【二】 田沼意次の官歴

意次の一生

田沼意次は何人ぞ。今ま其の家譜を見るに、義房子有り意行と云ふ、元祿十七甲申の年、紀侯吉宗に事ふ。吉宗入りて征夷に拜せらる。從て德川宗家に仕へ、主殿頭に任ず、食俸六百囊。享保十九甲寅年十二月十八日死す。子意次嗣ぐ、幕府に仕へ扈從と爲る。累遷して閣老に至り、四品に叙し、又た侍從に叙す。功有る毎に祿を增す、遂ひに五萬七千石の地を食み、遠江國相良を領す。明和二乙酉年、命を受けて相良に城き、城主と爲る。天明六丙午年、病有り仕を致す。後罪有り二萬石を削らる、又二萬七千石を削らる、纔かに一萬石の地を領す。閉居出るを容さず。

身自ら三君に事ふ、凡そ朝に在る五十五年、政を執る十有五年、同八戊申年八月廿四日死す。子意知山城守に任ず、參政に列す。天明四甲辰の年四月二日、父に先て死す。

意次の父

とある。又た續藩翰譜に據れば、

主殿頭源意次は、故主殿頭意行の嫡子也。意行初は專左衞門といふ。紀伊國和歌山に生長し、有德院殿（吉宗）の主税頭殿と申まいらせし時より、召つかはれ、本城に扈從して、御小姓となり、享保九年の冬叙爵して、主殿頭に任じ、同じき十九年十二月失せぬ。意次未だ龍助といひし時、西城の御小姓になされて、廩米三百俵を賜ふ。時に十五歳。ことし父におくれ、あくる二十年遺領を賜ひ、六百石元文二年叙爵し、延享二年惇信院殿（家重）御代繼がせ給ひしかば、意次もこれより本城に候す。御覺ことにして、次第に登庸せられたり。同じき四年九月十九日、御小姓組の番頭に准ぜられ、申次の事を承る。寛延元年閏十月朔日、番頭を兼ね、寶曆元年七月十八日、御側衆

意次次第に登庸

に遷り、頻りに所領の地加りて、同じき八年九月始めて萬石の家となる。遠江の國榛原郡相良の地にて充行れたり。明和四年七月朔日、御側の御用人となり、從四位下にのぼり、城持の列に入りて、其領地相良に城壘構ふべきよし仰被れり。同じき六年八月十八日、宿老に准ぜられし時、侍從にすすみ、安永元年正月十五日、連署の衆となれり。又所領の地も、いくたびといふ事なく、まし加へられて、後には五萬七千石迄になりたり。

連署の衆となる

かく世にあひたる身なれば、親戚うちひろごりて、その子ども皆さるべき家々に養はれたり。四男中務少輔忠繼は、水野出羽守忠友が子となり、三男丹後守雄貞は、土方近江守雄年が家を繼ぎ、七男大隅守隆祺は、九鬼式部少輔勝貞に養はる。嫡子山城守意知は、これよりさき叙爵して、雁の間の詰衆たりしが、天明元年十二月御奏者の衆に加り、中一とせを隔てゝ、同じき三年十一月朔日、少老の職となされ、俸米五千俵を賜ふ。そのかみ常憲院殿（綱吉）の御時にこそ、宿老の子として、少老にも補せられ、新恩の地など賜

其の子供

りけれ。近き世には、さらに傳へぬ程なれば、いともふも、こ

とわりなり。

とある。

意知斬らる

意次これより築地の別邸にうつりぬ。明和四年の春、居邸新に造りかへて、近きほどに職賜はりし、よろこびの饗宴あるべしなど聞えし彌生の二十四日といふに、不慮の事こそいできたれ。たとへば意知例の樣に、御所にまいりて、同列の人々と共に、まかりいづるとて、新番の輩守りてありしあたりを過し時、番衆の佐野善左衞門、つとはしりかゝり、意知が後より刀を拔きて斫りつけたり。其座に候せし人々、誰か斯る事あるべしと思ひよるべきことならねば、ただたちにたちて、我も人も互ひにあはてまどふをりしも、松平對馬守善左衞門をば抱きとめたれども、意知は早やあまた所に手負ひたれば、肩輿にて父の意次が邸までいでたりしが、その疵重りて、四月二日遂ひに空しくなりぬ。

意次失脚

抑も如何なる宿報の致す所にかあらん。天道の盈るをにくみて、俄かに禍すと申すめる。意次わづかなる家におひたちて、天下の事をとりはからふ職にさえいたりしかども、尚ほ足る事を知る心無りしかば、其子先づ横殺にかゝりぬ。意次當職數年の間、何の善政行ひもあらず。かつて人の恨み思ふ事のみ多ければ、これより後も、いかゞあるべきなど、世の人申たりしが、幾程なくして遂ひに職とどめられ、罪被りけるこそうたてけれ。先づ上記にて、田沼意次官歴の概略が知らるゝ。

【三】松平武元

武元の家柄

田沼意次に取りて、所謂る苦手と云ふ可きは、松平武元であつた。武元の先々代松平清武は、六代將軍家宣の同母弟だ。彼は館林に封ぜられ、六十二歳に

て、享保九年九月十六日卒した。其子清方彼に先て逝いたから、尾張家の庶流松平義行の二男武雅を養うて、嗣とした。武雅享保十三年七月廿八日、廿六歳にて卒したから、水戸家の庶流松平頼明の三男武元をして、家を嗣がしめた。

武元の官歴

武元家繼し時、陸奥國棚倉にうつす。十四年の冬、從五位下の右近將監に叙任す。元文四年九月朔日、御奏者の事を承り、延享元年五月十五日、寺社奉行をかぬ。三年五月十五日宿老になされ、浚明院（家治）未だ大納言にておはしませしにつけまゐらる。やがて從四位下に叙し、また館林の城にうつる。四年七月侍從に仕じ、九月三日本城の衆に加はりぬ。明和六年十二月朔日、所領加へられ、七千石を加へ合せて六萬千石。安永八年七月廿五日卒す。六十七歳。武元始めて仕へ奉りしより、ここに至て五十餘年。執政の期三十年にあまれり。慶長の昔より在職の任、此の如く久しかりしは、いとまれなり。これしかしながら謹厚忠誠なりしかば、上々の御覺えも他にこへ、世の人もよく服從しけるが故なるべし。〔續藩翰譜〕

武元の執政

又た曰く、

延享元年五月寺社奉行に任じ、十二月二十二日、有德公（吉宗）召して懇命あり。二年九月又召して親命、大納言殿（家治）も年若く、卿も亦た壯なれば、行く〳〵長く政務に預り輔佐すべしとなり。又父祖以來親しき家柄なればとて、他に異なる奬遇を蒙る。三年五月大納言殿（家治）の老中に附られ、本丸の事をも習ふべしとて、大御所（吉宗）の方にも給事せしむ。遂に館林の元封に復し、本城の老中となり、四月有德公（吉宗）の病重き時、常に其牀下に在りて事を執り、又其殯歛を主どる。寶暦十年將軍（家治）繼立れしとき、國務につき、心の及ぶ所、輔佐すべしとの命あり。同十一年堀田正亮卒して後は、大小の事悉く委任せられ、明年十二月勝手掛を命じ、明和六年日光山社參の事を掌り、安永五年從て神廟を拜し、これより先き安永元年江戸大火ありし時、將軍親書して賑恤の事を委托せらる。凡そ老中の職に在ること三十八年、當家の老中、かゝる年薄ある者は、未だあらざる所なり。然

武元の讒

して祿を益すと、僅に七千石に過ぎず。其の忠正にして謙謹なると、亦皆此の如し。將軍常に其の方正を憚り、西丸爺と稱して名いはず。役宅西丸下に在り。故に其世に在るや、姦諛の徒、皆其私を肆にするとを得ず。武元卒後、松平輝高、松平康福等、皆田沼水野の爲に弄せられ、政事大に衰へ、紀綱廢弛、風俗頽弊、賄賂公行し、小人志を得たりと云ふ。（德川十五代史）

憲次武元を畏憚

更らに續三王外記には、左の如く記してゐる。

王（將軍家治）田沼意次を寵する日に甚だし。……權中外を傾く。安永六年丁酉又た秩を益す七千石。時に館林侯（武元）首相たり、其の人と爲るや、方正にして嚴毅。固く舊章を守る。人有り謂て曰く、君の封惡田多し、之に易ふるに善地を以てす、邑を益すの號無くして而して入多きの實有らむ。君相と爲る數十年、王（將軍）亦た其の前朝の功臣たるを以て、君を敬重する他相に異り、若し之を請はゞ、必らず報られむ、盍んぞ早く之を圖らざる。侯色を正くして曰く、夫れ館林の地たるや、憲王（將軍綱吉）龍潛の時、此に藩屏たりき。吾

憲次贈封亦武元に聽く

祖清武宗室の後に從ふを以て此に封ぜらる。寡人の世に及んで、一旦封を移すと雖も、而も幾も無く封を復す。則ち抑も以ゑ有る也。縱し詔（將軍の命）あるも、寡人將さに之を辭せんとす、豈に地の肥磽を是れ論せん乎。其人愧て退く。意次是を以て之を憚る。秩を益の命下るに及んで、將さに之を辭せんとす。武元曰く、子秩未だ五萬に及ばず、德廟（吉宗）嘗て命有りて曰く、秩五萬石に盈たざる者は、或は其の積勞に因りて、邑を益す可き也。且つ王命（將軍の命）一たび出て、受けざれば不恭これより大なるはなし。たとひ殿下（將軍）之を過賜するも、子正議を以て之を辭す、君の過を天下に彰はし、而して獨り其身を潔す、之を受くるに若かざる也。……列相以下百官、媚を意次に求めざるは無し、獨り館林侯方正、王亦た之を敬重し名いはず、常に西城叟と稱す。（原註　其邸西城の下に在るを以て也。）故に其世を終るまで、意次未だ敢て專にせず。安永八年己亥七月、館林侯武元薨、意次是れより復た忌憚なし。……初め相良侯（田沼意次）

意次畏憚の一例

其子を謁者と爲さんと欲し、館林侯に謂うて曰く、君相と爲る最も久し、世子宜しく職に就くべき也。館林侯辭して曰く、吾兒弱、且つ諸侯の長子を舍いて、己子を以て職に充てなば、則ち衆皆な望を失はむ、此の如くならば、誰か解體せざらんや。是に於て意次、其の意を遂ぐるを得ず。館林侯薨ずるに及んで、相良世子意知（田沼意知）謁者と爲り、尋いで參政となる。

門地と在職久しきを要する

要するに松平武元は、積極的の賢相と云ふではなかつたが、其の門地の隆きと、其の在職の久しきと、而して其の自から守りて失ふなきとは、田沼意次をして、敬重、畏憚せしめたのであらう。武元沒して意次斥けらるゝ迄、足掛八年間は、全く田沼當人に取りての、黄金時代であつた。

【四】田沼と將軍家治

田沼の目先と手腕

抑も田沼は小身より出世し、宿老となり、天下の政治を、我意の如くに振り廻はしたる程の者なれば、其の人物も、他の肉食者と同一の論でなく、目先も見え、手腕もあつたに相違あるまい。否な小身の生ひ立ちであつた爲めに、能く人心の機微を察し、下情にも通曉し、巧みに他の弱點を捉へて、之に乘じ、以て其の嬖くなき權勢慾、利達慾、所有慾を、滿足せしめたものであらう。

大奥との關係

凡そ政治舞臺の裏面には、概ね女性が居る。されば苟も政權に有り付かんとする者は、必ず此の機關を見出して、それと結托せぬものはない。田沼意次の如きも、正しく其の一人であつた。

意次幼して惇王（家重）の郎中となり、遂ひに給事中に擢らる。今王（家治）位に卽く、亦寵有り、累遷して政に當るに至る。而して獨り欲に饜ず、嬖を内に行ひ、寵を固くす。竊かに津田夫人（家治の寵妾）識る所の女を求め、己れが妾と爲し、時々後宮に如き、夫人を候せしむ。其の至るや、侍女及び婢妾、皆な贈遺有り。（續三王外記）

意次の手段

彼が如何に大奥と貧縁したかは、此にて略ぼ察するとが能ふ。

其方儀、積年御側近相勤、格別蒙二御懇一、抜群之御恩を以、結構之身分に候得ば、寸忠を建、御學問を御勸申上、何卒御政事も御自身之爲二知召一、御先代樣御同樣之御成立にて被レ爲レ在、上下一統御仁德を奉二感戴一候樣、如何樣にも心付、諸事御傳敎可二申上一之處。左なくして御讀書之儀は勿論、本朝古來之義士勇士忠臣諫臣之儀等に拘り候儀、御側向より不二申上一候樣に嚴敷制禁申付、譬ば小兒同樣に御仕立申。御政事之筋は、夢にも御存知不レ被レ遊、天然之御物好計にて、世中はいつ迄も、殷富と而已被二思召一、其御物好之處より阿諛を以て付入、追々巧智を廻らし、近年詮舉進途之權家は、皆々其方親族之者計にて、其方召仕之妾を願望之媒となし、度々登城爲レ仕、數日逗留、其節は莫大之金帛を相贈、內外之親睦を結び置候儀、人口を不レ顧致方に候。

此れは當時、田沼意次罪狀仰渡書に擬して、作つた文だ。

家治意次の關係

家重遺訓による

家治意次を叱斥

如何に彼が人主を愚にし、自己の威福を逞うしたかは、此にて察せらるゝ。併し家治は何れかと云へば、其父家重よりも寧ろ聰明にして、であつたらしい。其の祖父吉宗は、彼の幼時より尤も望を彼に屬してゐたらしい。而して彼と田沼意次との關係に就ては、浚明院殿御實紀には、左の如く記してある。

田沼主殿頭意次を、厚く待遇なし給ひけるが、惇信院殿（家重）御眷注深き人にて、大漸にのぞませ給ひしとき、主殿はまたうどのものなり、行々こころを添て召仕はるべきよし、御遺敎ありしにより、至孝の御心より、なを登庸もなされしなるべしと、古き人は今もかたり傳ふ。されば年紀て後、主殿頭威福を張り、もはら壅蔽せし樣にのみ申傳ふるはあやまりなり。主殿頭も常に公の御英明をおそれ奉りしとぞ。いつのことにか御城近邊大火ありしに、主殿頭おそく出仕しければ、何故おそかりしにやと、とはしめ給ひつるに、急に答申べき詞なく、をのれの宅に火近く候まゝ、防禦の事沙汰すると、ひまどりしよし聞えあげ奉りしに。さらば我城を大事とするや、汝が

役宅を大事と思ふやと問かへし給ひしかば、主殿頭たちまち語ふさがり、恐懼し汗ぬぐひ退きたりしとぞ。かゝ樣のたぐひまゝありしといへり。されど彼舉動御心にかなはせ給はぬ事のおはしけるにや、御病重きに至り、遂に職をとどめ給ひしは、やむ事を得ざるゆへなるべし。

是れ史家回護の筆

とある。此れは恐らくは、御用史家回護の筆であらう。然も彼是參酌し來れば、家治は決して闇愚の資ではなかつた。然も彼が意次に專任し、意次が彼の聰明を壅蔽し、其の威福を逞くしたとは、到底爭ひ難き事實であらう。

家治幼時の氣力

草體の龍字の點の打ち所

明廟御幼くおはせし御時大御所德廟の御傍に在せ玉ひて草體の龍字を大書あらせられしに、字體大きく紙に溢るべき御筆勢なりしを、大御所いかゞあらんと御覽ぜさせ玉ふうち、果て點を打ち玉ふべき空白の處なかりしかば終の一點を御疊にしたゝかに點ぜさせ玉ひしとぞ。げに天下を知ろし玉ふべき著君なりとて、大御所殊に御欣悅ありしとなり。〔甲子夜話〕

賄賂の先驅

【五】賄賂の問屋

賄賂政治は、必ずしも田沼意次に始まつたのではあるまい。家重の寵臣大岡忠光の如きも、身を持すること謹恭であつたが、賄賂にかけては、決して拔目はなかつた。彼は勿論、彼の一家の者共迄、何れも諸人の贈遺を受け、蓄積を事とした。其の家人の大貫東馬の如きは、大岡忠光の盛時に、十分貯へ、やがて家人を辭し、與力となり、田沼意次や、忠光の子大岡兵庫頭を便りて、御勘定たらんとしたが。松平武元の爲めに、苟も陪臣が、直參となりて、譜代となる時には、天下に陪臣無きに至らんとて、許容されなかつた。然も武元死後は、御勘定となり、又た代官に進み、舊主大岡家と、兩敬の格となつた。

意次の賄賂奬勵

斯る次第で、賄賂は、田沼意次に始まつたのではない。然も田沼時代程、賄賂の公行したることは、所謂る前代未聞と云ふも、差支なき程であつた。そは田沼意次自身が、公々然として、賄賂の奬勵者であつたからだ。

主殿頭（意次）常に云るは、金銀は、人々命にもかへがたき程の寶なり。其寶を贈りても、御奉公いたし度と願ふほどの人なれば、其志上に忠なること明なり。志の厚薄は、音信の多少にあらはるべしといへり。

又云るは、予日々登城して、國家の爲に苦勞して、一刻も安き心なし。只退朝の時、我邸の長廊下に、諸家の音物おびたゞしく積置たるを見るのみ、意を慰するに足れりといへるとぞ。〔江都聞見集〕

唯意次の光を恐る

是れ恐らくは、意次の心中を忖度したるものであらう。

此殿（田沼意次）の上座には、彦根中將（井伊直幸）濱田侍從（松平康福）などおはしませど、其人々の事は申さで、唯此殿の御光をのみ、四海の人々恐れてけり。然るにより日毎夜毎に、其門に出入し、膝行頓首するもの市の如く、我おとらじと、殿の御旨に叶ふべしとて、珍器珍物其價を厭はず、買ひ求め贈り參らせしにより、金銀珠玉は、云ふに及ばず、ありとあらゆる異國の寶まで、此家に集らざるはなし。

意次の家に無き物

一日或人意知（意次の長子）朝臣に對し、御家には昔し今の珍寶不足し給ふものは有まじきと申されしに、其席に羽州山形の太守永朝朝臣居合せ給ひ、それが中に、戰場の血付たる武具は所持し給ふまじと、戯れ給ひし程也。

馬の形ある物皆集まる

また此頃世の人、己が支干の七つ目にあたれる甲乙の形ある者、常に愛し翫ぶ時は、はからざる幸ひを得る事有と申觸たり。此殿子の年の御生れにて、七つ目午にあたり給ふにより、馬を愛し給ふの由、人々傳へ聞、太刀かたなの金具より、掛物屏風類に至るまで、物の上手の作り出せる馬の形有物は一々取て參らせしにより、皆此殿の御家に集りぬ。もしも世に殘りある時は、其の價むかしに十倍すと也。

外國貿易に影響

亦夫より猶甚だしきは、唐土、阿蘭陀の商人ども、日本にては七曜の模樣附たる物こそ、能價に成ぬと心得、其模樣付たる織物、著物の類、積來ること多し。是は此殿の御家紋七曜なるが故なれば也。〔後見草〕

されば田沼家に於ける賄賂は、支那、阿蘭陀の輸入品にまでも、其の影響を與

贈物の驕奢

へた程であつた。

明和安永の頃は、一時の風習にて、中秋觀月の宴、甚だ盛んにて、貴權紳士の家々には、盛宴を張て、客を招き、且その日には、親族朋友をいはず、常に親しく往來するものは、互に贈物あり。此贈物その家によりては、なか〳〵鉅費を要せしと思ふもあり。京畿近國にて、廿萬石ほど領せらるゝ、或諸侯より（彦根侯井伊直幸ならむ）田沼へ贈られしは、石臺の方九尺ばかりなる内へ、一の小廬を設け、屋上は小判にて葺き、室内は窓、戸ぼそ、板壁などの類ひ、皆金銀幣を裝して飾りとし、庭上は豆銀を以て、立石敷石となす。其あなたには、青茅數株を植、その下に、銀鎖にてつなげる雛豬を臥さしむ。是は活けるまゝのものなり。乃ち山家の秋景を模して造れるものなりとぞ。其贈物の侈大なること、此の如しとなり。〔德川太平記〕

如上の引用したる諸書によりて、如何に田沼家が、賄賂の問屋であつたかゞ、判知る。

【六】田沼の門戸市の如し

田沼家の客

田沼意次の門は、實に市の如くであつた。然も彼が心は果して水の如くであつたか、甚だ覺束ない。今ま試みに、當時の平戸藩主松浦清の手記を案ずるに、

先年田沼氏老職にて、盛なる頃は、予も廿許の頃にて、世の習の雲路の志も有て、屢彼第に往たり。予は大勝手を申込て、主人に逢しが、その間大底三十餘席も敷べき處なりき。他の老職の座敷は、大方一側に居並び、障子なきを後にして居るが通例なるに、田沼の座敷は、兩側に居並び、夫にても人數餘るゆへ、後は又其中間にいく筋にも並び、夫にても人餘り、又其下に横に居並び、其餘は座敷の外通りに、幾人も並居ることなりき。その輩は、主人の出ても見えざる程の所なり。其人の多きこと思ひやるべし。

面接方法

さて主人出て、客と逢ときも、外々にては、主人は餘程客と離れて坐し、挨拶することなりしが、田沼は多人席に溢るゝゆへ、よう〳〵と主人出座の所、

二三尺許りを明て客著座するゆへ、主人出て逢ときも、主客互に面を接する計なり。繁昌とはいへども、亦不禮とも云べきありさまなり。

其臣下亦た同樣

さて何方も佩刀は、座敷の次に脱て置くことなるが、如レ此の客ゆへ、座敷の次には、幾十腰か知れず刀を並て、海波を畫けるが如くなりし。〔甲子夜話〕

然も權門の主人、獨り此の如くにてなく、其の臣も亦た同樣であつた。尙ほ松浦清は、左の如く記してゐる。

此外にも今にいかがと臆中に殘りしは、公用人三浦某と云しを、用賴に約して、主人の逢日に往て、取次を以て、三浦へ申入ければ、答るには、只今御目にかかるべし。然ども、それに出候ときは、御客の方御とりまきなさるゝ故、中々急に謁見叶難く候間、何卒密に別席に御入り有たしとて、予を隱處へ通し、密に逢たりし。陪臣の身として、我等をかく取扱こと、世に稀なることなるべし。

予は大勝手の外は知らず、中勝手、親類勝手、表座敷等、定めて其體は同じかるべし。當年の權勢、これにて思ひ知るべし。然ども不義の富貴、信に浮雲の如くなりき。〔同上〕

井伊侯亦た贈賄

とある。此の如く田沼の門戸に趨走する者多く、日勤の者は勿論、甚だしきは、朝夕二回、或は一日に三回も出掛けた者ありと云ふ。乃ち大老井伊直幸の如きも、大老の職に有り附く爲めには、田沼に莫大の黃白を贈つたと云ふ。既揭の近畿大名が、田沼に中秋の贈物をしたと云ふのは、彼のことであらう。〔參照 五〕

中秋進物の贅澤

尙ほ中秋の進物には、諸家より種々の趣向を凝らしたものが出て來つた。

小さな青竹の籃に、潑剌たる大鱚七八つに、少しの野菜をあしらつて、それに青柚子一つ附けて、其柚子に、後藤の彫刻にかゝる、萩薄の模樣ある柄の小刀にて、その柚子を貫いてあつた。云ふ迄もなく此れは天下の逸品にて、數十金に當るものだ。又た或よりは大なる竹籃に、鮪二尾を入れてあつた。當時は稀品にて、餘程高價のものだ。〔田沼時代〕

機嫁取りの競爭

斯る次第で、上は大名より下は旗本に至る迄、皆な田沼の一顰一笑を見て、喜

憂をする程であつた。されば其の田沼の御機嫌を取らんと、互ひに相ひ競爭する情態も、亦た實に憐れむ可きものがあつた。例へば、田沼の下屋敷が稻荷堀に出來、意次が其の普請の落成したるを見、其の池を眺めつゝ、此内に鯉や鮒が、池中に躍つてゐたと云ふ。又た意次が登城の後、歸り來れば、既に鯉や鮒が、池游いだらばとの一語を漏らしたが、暑に中りて、閑臥してゐた處、病氣見舞の者が、彼の臣下に、頃は何を愛玩せらるるやと問うたに、只今岩石菖を、枕邊に置いてゐるとの答を聞き。乍ち諸方より各種の岩石菖を持ち込み、二三日の間に、大なる座敷二つに、隙間もなき迄に陳列して、取扱にも當惑したと云ふ。亦た以て如何に、彼が門戸の繁昌したかを知る可きであらう。

松本伊豆守の驕侈

されば彼の屬僚の勘定奉行松本伊豆守、赤井越前守の如きも、何れもそれ〴〵威福を逞うし、收賄を事とし、其の驕奢も實に甚だしく、伊豆守の如きは、夏は廊から左右の小なる部屋幾間となく、打通しに蚊帳を吊り、その各室毎に妾を臥さしめ、夜中何れの室に至るも、同一の蚊帳の内にあるべく、趣向を凝したと云ひ。又た其の子供が癖症にて、雨聲を聞くを厭ふからとて、屋上に棚を造り、天幕を張つて、雨聲を遮つたと云ふ程であつた。

上官眼中に無し

【七】賄賂は政治機關の動力

田沼は實に虎の威を假る狐であつた。彼は執政とならざる以前から、其の上官をも、殆んど眼中には無かつた。舊例内外の諸官僚が、殿中にて宿老に出會する折は、必ず伏拜して敬禮した。然るに田沼意次のみは、只だ趨り過ぎて拜揖しなかつた。此に於て老中秋元涼朝は、其の同僚―側衆―を召んで、意次の不敬を咎めた。意次は此れから涼朝を慊らず思うた。やがて涼朝は辭職を申し出でた。此れは意次が讒言を慮つた故だ。彼は人に語りて、予若し田沼が不敬を咎めずんば、遂ひに此れが例とならんも期し難し、斯くては宿老の威信を

秋元涼朝の硬骨

損ずる甚だし。予は一代、宿老は百代、一身の利害にて、此事を看過す可きではないと云うた。斯くて涼朝は、明和元年三月職を解き、翌二年十二月廿二日、再び西城の宿老に補せられたが、同四年六月又た職を辭し、五年五月廿四日仕を致し、入道して休弦と稱した。惟ふに意次の報復を避けたのであらう。

意次一門の榮達

當時田沼の一家一門、悉く皆な顯要に列した。其弟意誠は、一橋家の家老となつた。意誠が死するや、意誠の子意致、亦た父の職に擢任せられた。

其の親族姻戚悉く顯官となる。給事中(御側衆)水野忠友は松本侯正直(忠恒)の男也。松本國除かれ、更らに其子正周(忠毅)に七千石の邑を賜ふ。相繼で忠友に至る。封侯を得て、祖先の恥を雪がんと欲し、厚く意次に賄ひ、且つ其の第三子を養うて、己が嗣となし、忠德と名く。是に於て參政(若年寄)と爲り、爵を列侯に賜ひ、秩を益して萬石と爲る。何もなく侍中(御側御用人)となり、沼津に封ぜらる。意次又た其孫龍助の爲めに、懸河侯資愛(太田)の女を聘す。既にして資愛も亦た太常(寺社奉行)より遷りて、參政(若年寄)と爲る。

松平正敏の贈賄買官

是によりて、列相以下百官媚を意次に求めざるは無し。……王亦た政事を以て意次に委ね、百僚皆な意次に敬事す。事大小となく、意次に因りて白ふし決す。時に高崎侯輝高館林侯に代りて政を爲し、濱田侯康福次相となる。皆な位に充つるのみ。〔續三王外記〕

又た忍城主松平正允は、厚く意次に賄うて、漸く老中となつたが、五個月で病死した。其子の正敏は五十三歳であつたから、大いに焦りて意次に賄ひ、御奏者番となつた。此れには頗る理由があつた。

忍侯(松平正敏)別邸稲荷渠に在り、其隣は則ち相良侯の別邸也。意次嘗て其邸を廣めんと欲す。忍侯之を知る、既にして稲荷渠火あり、二邸を延燒す。忍侯因りて其の邸墟を相良侯に贈らんと欲す。法私かに之を贈るを得ず。乃ち相良侯の事を用ふる者と謀りて、其の邸墟を官府に輸す。王(將軍)果して之を相良侯に賜ふ。相良侯一金を出さずして、而して其邸を益す。大いに之を德とす。十二月忍侯爵を四品(從四位)に進む、故事列相(御老中)の嗣、年五十に

及べば、則ち四位と爲る。忍侯既に已に五十を過ぎ、爵を進む、固より其所也。知らざる者は、以て相良侯の爲す所と爲す也。忍侯尙ほ相良侯に賄ふ。是年天明と改元す。四年甲辰に及んで、遂ひに大坂城留守（城代）と爲るを得たり。〔同上〕

以上掲ぐる所によりて、如何に賄賂が、實際の政治と、交渉あつたかゞ判知る。乃ち一切の政治の機關は、賄賂の動力もて運用したと云ふも、過當の言ではあるまい。

賄賂の相場格付

ままごとといふ信物

天明安永の頃は田沼侯執政にて、權門賄賂の甚しく行はれて、賢愚を問はず、風潮一に此に趨きたるが、其折には長崎奉行は二千兩、御目附は千兩といふ賄賂の相場立ちしと申す位なり。此時吉原町にまゝごとゝいふ普信物を調ふる家ありし由。是は五尺程の押入小棚樣の物出來、其中に飲食物吸物さしみ口取、其外種々の種料より庖丁俎板迄も仕込みあり。花月の夜雨雪の窓に開けば、忽ち座を賑はす爲め、權家へ送與して媚を取るの具なるが、大抵七八兩位より十四五兩迄の直段なりし由、ある老人の話に承はりたり。〔五月雨草紙〕

第二章　蘭學恢弘の二人

【八】蘭學興隆の先驅者

一二の讃稱すべき事

田沼の混濁時代に於ても、尙ほ一二の讃稱す可き事がないでもない。その一は蘭學の勃興だ。此れは必ずしも田沼が、蘭學を奬勵したが爲とは云はぬ。されど時勢が自然に、此の方向に傾きたると、將た田沼の外國物を玩ぶ道樂と、彼が山師的興利的行徑とは、期せずして此の勢を助長した。

蘭學二恩人

抑も海外知識輸入が、八代將軍吉宗に負ふ所の多大なるは、既記の通りだ。〔參照　吉宗時代、八六―八九〕特に此の方面の二恩人として、新井白石、青木昆陽を擧げた。〔參照　同上、九一〕而して直接に蘭學の興隆に貢献したのは、實に青木昆陽と云はねばならぬ。

青木昆陽

昆陽は文藏と云ひ、元祿十一年に生れたる、江戸日本橋の魚問屋の子であることは、既記の通りだ。彼は幼にして學を好み、京都に赴き、伊藤東涯に學んだが。彼の所志が經世、實用の上にあつた爲め、浮文空理を事とせず、專ら其の方面の學問を修めた。歸來江戸八丁堀に住し、生徒を集め敎授したが、頗る貧乏であつた。享保十一年父を亡うて、支那流の三年の喪に服し、更らに母を亡うて、復た三年の喪に服し、都合六年酒肉を禁じ、唯だ朝夕粥を啜り、墓參の他は、外出しなかつた。

昆陽の立身

彼の住居は、町奉行附の與力加藤又左衞門の屋敷內にあつた。又左衞門は、枝直卽ち千蔭の父にて、賀茂眞淵の友である。彼は昆陽の行狀の奇特なるを見て、之を其の長官たる町奉行大岡越前守忠相に薦めた。而して其の出身の手引として、豫て著はしたる『蕃薯考』を提出した。此れは昆陽が所謂る甘藷の、民生に必須であるを知り、自から其の種を取り寄せ、之を下總の馬加村に試植し。且つ支那の書籍に就て、其の栽培法を著はしたものだ。

蕃薯天下に廣まる

當時の將軍吉宗は、之を見て、大いに悅び、早速薩摩から其種を取り寄せ、小

石川御藥園に培養し、官費もて蒔藷考を出版し、其の種を諸方に分配せしめた。此れが享保二十年の頃で、此の如くして薩摩薯は、日本全國に播まつた。而して此れと同時に、昆陽は出身した。

蘭書講讀を命ぜらる

彼が將軍吉宗から、蘭書を讀むを命ぜられたのは、偶然の事からであつた。一日將軍は和蘭の天文書を披らき、其の精細の圖を見て、若し其の文字が讀めたならば、益を得ると多からんと言うたが、其側に侍したる者が、豫て靑木文藏に其志ある旨を上申した。將軍はさらば然かせよと命じた。此れが寛保元年、昆陽四十四歳の時であつた。當時昆陽は既に、百五十俵取りの旗本に列してゐた。

昆陽の蘭學著述

昆陽が蘭學を修めたことは、既記の通りだ。〔參照　吉宗時代、九一〕彼の著述には、『和蘭文字略考』『和蘭話譯』『和蘭文譯』又た『和蘭櫻木一角考』等がある。其中には、和蘭のアルファベットより始めて、綴り字、名詞、動詞、形容詞等の七八百語書いてある。

多少吉宗に用ひらる

昆陽は一代の通儒であつた。彼は『經濟纂要』『官職略記』『刑法國字譯』『國家食貨略』『國家金銀錢譜』などの著述、凡そ二十五部あつた。彼が建白書を見れば、彼は將軍吉宗には、多少用ひられてゐた樣だ。彼が大名旗本救濟に付ての建白書中に、

此度不二存寄一御用被二仰付一、度々御前へ罷出、御尋の事共も御座候に付、身に餘り難レ有　奉レ存、年來存付罷有候事共、萬一御用にも相立可レ申哉と存申上候。

とある。されば若し吉宗にして、生存したらんには、彼の蘭學の方面も、尙ほ開發す可き機會があつたであらう。されど將軍は薨じ、其の知己たる大岡忠相は逝き、彼も其志を伸ぶるに所なかつたであらう。然も彼は老に至りて、尙ほ其志を渝へず、年々江戸に參府する和蘭甲比丹に就て、相質した。斯くて彼は、死する三年前には、御書物奉行に昇進した。而して明和六年十月、七十二歳にて沒した。

【九】前野良澤（一）

蘭學大成者

青木昆陽が、蘭學に大功あるは、彼自身の著述よりも、寧ろ其學を門人に傳へ、その門人によりて、其學を大成するに貢献した事だ。而して其の門人とは、前野良澤の事である。

昆陽と良澤との關係

前野は豐前中津藩の醫者。彼が蘭學を修む可く、青木昆陽の門に入りたるは、明和六年。昆陽は悉く其の知る所を良澤に傳へ、而して其の十月に逝いた。

良澤の業績一斑

されば學統の繋がるは、實に其機一髮と云ふ所であつた。

其の發憤

彼が如何に蘭學の大成に貢献したかは、大槻盤水の『蘭學階梯』に、之を特筆大書してゐる。

東都城南鐵砲洲と云所に、蘭化（前野良澤）先生と云人あり。醫を以て、世々中津侯（奥平）に仕ふ。天資豪邁にして、異書を探り、奇思に耽ける。其性世の未だ發せざる者を發せんとするの僻あり。一日同藩の隱士、坂江鷗といへる人、蘭書の殘編を見せたり。其頃は絶へて知る人なく、徒に奇觀に供するまでにてありしが、先生忽然として、彼れも我も耳目鼻口の人なり。同體の人の錄するもの、何ぞ讀得可らざるものあらんや。其の書を讀得て、これを了解せんとの心あり。幸ひに昆陽子（青木）の在せるに遇へり。卽ち紹介を求て、其塾に就き、日夜ねんごろに其書を學べり。昆陽氏其志の厚きに感じて、其蘊を盡して傳ふといへり。是より先生、初て彼の邦言辭の一端を知り、手を釋ずして務められしかども、千古未發の業なれば、容易に會得し難く、寤寐に勞しぬれども、更らに其事成らざりしが、其國君賢明にして、此學の益を知り、其の道の開けざるを歎き給ひ、先生をして、長崎に游學せしむ。これは明和五六年の際の事なり。先生命を受て、彼地に到り、譯人吉雄、楢木等に交り、昆陽子傳ふる所を增益せられしかども、はかばかしき業も遂げずして東都に歸り、又其事を勉勵せられしかば、漸々に六七百言を暗記せり。されども章句を解して、其成說を飜譯するに至りては、未だ企て及ばず。是

昆陽に學ぶ

長崎に學ぶ

長崎再遊

によりて再び長崎に遊んで、毎事譯家に扣れしが、前にも說ける如く、譯家は固より通辯の專業にして、讀書譯文の暇なかりければ、幾たび討論しても詳審ならず。先生此の由を悟り、譯家に秘藏せし彼邦釋辭の書、並に醫術の書、五六部を請ひ求めて、東都に齎し歸り、日夜手を釋ず、彼の傳へ得る所の僅の釋語を據とし、蘭人マーリンが收錄せる所の釋辭の書を取り、彼此校考し、已に知る所のものに因て、未だ知らざる所を推し明して、稍く其一二を窺ひ得たり。

豁然自得

歲月既に六七年を經て、豁然として自得する所ありて、始めて和蘭書釋譯の成業を遂げられしとなり。誠に千載の鴻業、不朽の大功と云ふべし。星霜を積むと僅に十五六歲には過ぎず。其間先生著す所にして、此學の筌蹄となるべき書には、和蘭譯文略、蘭譯筌、助語參考、蘭語隨筆、古言考、點例考等なり。其餘、思思未通、管蠡秘言、仁言私說、八種字考、彗星考、輿地圖編の類なり。此外天文、地理及び醫算、測量等の譯稿、篇をなすもの枚擧すべからず。是れよりして同好の二三子、尾滕、鶴齋、淳庵、月池、龍橋、嶺、石川、桐山、東溪、東蘭、順卿、淡浦、槐園、江漢の諸子、及び余茂質（大槻玄澤號粲水）が輩、其門に從游し、其の讀書、譯文の法を習得て、日夜研精し、月を累ね年を積み、其稿を脫すると、脫せざると數部に及べり。所謂る解體新書、瘍醫新書、和蘭局方、和蘭藥譜、海上備要方、和蘭藥撰、八刺精要、底野迦眞方、五液精要、西圖略說、新撰泰西輿地圖說等なり。其餘天文、星象、及び內外治療、技術末藝等の諸書、諸器の類、漸々製作するもの、數ふるに遑あらず。

著書

門弟

解譯書

記して此に至れば、前野良澤の蘭學に於ける、其の功績亦た大なりと云はねばならぬ。

【一〇】前野良澤（二）

奇物變人

前野良澤は、實に篤學者であつた。同時に世間から見れば、恐らくは奇物、變人の類であつたらう。彼は中津藩主奥平家の醫師でありながら、勤務を第二として、只だ蘭學の研究を事とした。彼は殆んど閉戸先生であつた。同僚が之を非難したるや、藩主は『あれはあゝして置け、前野は和蘭人の化物である、』と云うた。良澤は其の君主から斯る言葉を賜はり、今は何等の掛念なく、只管ら蘭學に耽つた。而して自から蘭化と號するに至つた。

蘭化號の由來

蘭化とは、和蘭化すると云ふではない、和蘭人の化物と云ふ意味だ。尚ほ彼の友人なる杉田鶴齋——玄白——の蘭學事始には、彼に就て斯く記してゐる。

伯父全澤の教育法

扨翁（杉田玄白）が友、豐前中津侯の醫官前野良澤といへるものあり。此人幼にして孤となり、其伯父淀侯の醫師宮田全澤といふ人に養れて、成り立ちし男なり。此全澤博學の人なりしが、天性奇人にて、萬事其好む所、常人に異なりしにより、其良澤を教育せし所も、又非常なりしとなり。其教に、人といふ者は、世に廢れんと思ふ藝能は、學置て、末々までも絶へざる樣にし、當時人のすてはててせぬ事になりしをば、これを爲して、世の爲に、後に其事の殘る樣にすべしと、教へられしよし。

一節截猿著なる學ぶ

如何樣其教に違はず、此の良澤といへる男も、天然の奇士にてありしなり。專ら醫業を勵み、東洞（吉益）の流を信じて、其業を勤め、遊藝にても、世にすたりし一節截を稽古して、其の秘曲を極め、又をかしきは、猿若狂言の會ありと聞て、これも稽古に通ひし事もありたり。如此奇を好む性なりしにより、青木君（文藏昆陽）の門に入て、和蘭の横文字と、其の一二の國語をも習ひしなり。

良澤蘭學始めの年代

（原註　後に著せる蘭譯筌といふものを見るに、それより以前の事とみえしに、同藩の坂江鷗といふ隱士、一日蘭書の殘篇を良澤へ見せ、これは讀わけ解すべきものにやといひしに。是を借り受けて、つくづく思ふに、國異に言殊なると雖も、同じく人のなす所にして、なす可らざる所のものにあらん

やと、志ざせしに、扨これに取付べきの便なきを、憾み居たりしことなり。夫より不圖青木先生此學に通じ給ふと聞き、遂ひに其門に入り、これを學び、和蘭文字略考抔といふ著書を授かり、先生の學び識れる所をば、聞書せりとなり。〔蘭學事始〕

是は其頃、青木先生長崎より歸府の後の事と聞ゆ。先生長崎へ行かれしは、延享の頃にやと思はる。良澤の入門は、寶曆の末、明和の初年、歳四十餘の時なりしが、これ醫師にて常人の學べる始なるべし。〔蘭學事始〕

何れにしても明和年代

尙ほ洋學年表に據れば、良澤が蘭書の殘篇を見て、之を讀まんとする志を起したるを、明和三年とし、青木昆陽に入門したるを、明和六年、良澤四十七歳の時としてゐる。何れにしても彼が斯學に志したるは、明和年代であつた。

吉雄等との關係

年は忘れたり、一春かの幸左衞門（大通辭吉雄耕牛）阿蘭陀附添にて參府せし頃、豐前中津邸にて、昌庶公の御母君、御座内にて、不慮に御脛を打傷し給ひし事あり。貴人の事なれば、大騷ぎにて、彼是醫師を御招きの處、幸ひに吉雄幸左衞門出府居合せ候事ゆゑ、直に御招きありて、御療治被仰付、御順快ありたり。此時前野良澤御手醫師の事ゆゑ、懸合仰付られ、格別懇意となりたり。これ等、蘭學の世に開くべき一つといふべし。其後其主の供にて、中津へ行しかば、侯へ願ひ奉りて、彼地へ下り、專ら吉雄、楢林等に從ひて、百日計りも逗留し、晝夜精一に蘭語を習ひ、先に青木先生より學びし、類語と題せる書の諸言を本として復習訂正し、尙ほこれに足し補ひて、僅に七百餘言を習ひ得、彼國の字體、文章等の事等も、荒增し聞書して持歸りし事ありたり。此時少々は、蘭書も求めて歸府せり。是れ長崎へ外治稽古の爲めならで、彼書說學ばんとて參りし人の始めなり。〔同　上〕

良澤の貧

洋學年表には、之を明和七年に繫いでゐる。

良澤は篤學者であると同時に、貧乏であつた。彼は一生の内に、せめて我が書齋を造りたいと思ふと言うた。それを聞いて、門人の江馬春嶺が、其の所藏の二十一史の一部を賣却して、二千兩の金を得、之を彼に献じ、それにて書齋が出來たと云ふ。彼の食物は麥飯に豆腐の殼と、唐辛子を掛けて喫し、倦めば燒酎

を一杯飲むだけのことであつた。彼の著作は、『和蘭譯文略』『蘭譯大成』『和蘭譯筌』『字學小成』などあり、其外西洋の地理歴史の書もある。彼は享和三年八十一歳にて逝いた。

【一】杉田玄白（一）

玄白の生時

前野良澤に次で、蘭學の殊勳者は、杉田玄白だ。良澤は享保八年癸卯に生れたが、玄白は享保十八年癸丑に生れた。彼の父は甫仙と稱し、若州小濱藩主酒井家の醫員で、其の生るゝや、母は難産で絶命した。傍人何れもそれに氣を取られて、兒を顧みるものなく、既に死するものとして、之を布片に包みて、墓側に措いたが。後ち其の生命ありて、且つ男兒なるを見て、漸く之を哺育した。

杉田玄白畫像（蘭學事始所載）

西玄哲に學ぶ

彼は爾來、牛込なる若州藩邸父の膝下に在つたが、十七八歳の頃、志を立てゝ、父に向ひ、良師を求め、其業を修めんことを申し出でた。父は欣然として、當時外科にて有名なる官醫の、二本榎に住する西玄哲に入門せしめた。彼は牛込より二本榎迄、日々往來して、其の學を勵んだ。又た本郷に宮瀨龍門なる儒者あり、これに就て經史を研究した。

外科醫開業、蘭學從事

二十五歳の時、藩侯から部屋住料五人扶持を賜はり、日本橋通四丁目に別宅し、外科醫を開業した。三十七歳の時、父甫仙死したから、爾來、若州侯の新大橋の中屋敷内に住居して、蘭學に從事した。四十四歳にして、再び濱町に移つた。

翁（玄白）兼て良澤は、和蘭の事に志ありや否は知らず。久しき事にて、年月は忘れたり。明和の初年の事なりしが、或る年の春、恒例の如く、拜禮として、蘭人江戸へ來りし時、良澤、翁が宅へ訪れ來れり。これより何方へ行給ふと問ひしに、今日は蘭人の客屋に參り、通詞に逢ふて、和蘭の事を聞き、

西善三郎に逢ふ

模樣により、蘭語抔も問ひ尋ねんがためなりといへり。翁其頃未だ年若く、客氣甚しく、何事もうつり易き頃なれば、願くば我も同道し給れ、共に尋試みたしと申ければ、いと易き事なりとて、同道して、彼客屋に行きたり。

善三郎の忠言

其年大通詞は、西善三郎と申す者參りたり。良澤引合せにて、しか〳〵のよし申述たるに、善三郎聞て、それは必ず御無用なり。夫は何故なれば、彼辭を習ひて理會するといふは難き事なり。たとへば、湯水又は酒を呑と云ふかと問んとするに、最初は手眞似にて問ふより外の仕かたはなし。酒をのむといふ事を問んとするに、先づ茶碗にても持添へ、注ぐ眞似して口につけて、是はと問へば、うなづきてデリンキと敎ゆ、是卽ちのむ事なり。扨上戸と下戸とを問ふには、手眞似にて問ふべき仕かたはなし。これは數々呑むと、少々呑にて、差別わかるなり。されども多く呑でも酒を好まざる人あり。又少くのみても好人あり。是は情の上の事なれば、なすべき樣なし。扨其好き嗜むといふ事は、アーンテレッケンといふなり。我身通詞の家に生れ、幼より其事に馴居ながら、其辭の意、何の譯といふ事を知らず、年五十に及んで、此度の道中にて、其意を始て解得たり。アーンとは、元と向ふといふ。テレッケンとは引事なり。其向ひ引といふは、向ふのものを、手前へ引寄るなり。酒好む上戸といふと、向ふの物を、手前へ引度思ふなり。卽ち好の意なり。又故郷を思ふも斯くいふ。是又故郷を手元へ引よせ度と思ふ意あればなり。

蘭語學習の困難

彼言語をさらに習ひ得んとするには、箇樣に面倒なるものにして、我輩常に阿蘭陀人に朝夕してすら、容易に調得し難し。中々江戸などに居られて、學んと思ひ給ふは、不レ叶事なり。夫故野呂、靑木兩君など、御用にて年々此客館へ相越され、一かたならず御出精なれども、はか〳〵しく御合點參らぬなり。其元にも無用の方然るべしと異見したり。良澤は如何承りしか、翁は性急の生れゆゑ、其說も尤と聞き、その如く面倒なる事をなし遂る氣根はなし。徒に日月を費すは、無益なる事と思ひ、敢て學ぶ心はなくして

歸りぬ。〔蘭學事始〕

玄白往事の回顧

此の如く最初は、大通辭に出鼻を折られた。されば彼が文化十二年、八十三歳の時、往事を回顧して、

今時、世間に蘭學といふ事、專ら行はれ、志を立つる人は、篤く學び、無識なる者は、漫りにこれを誇張す。其初を顧み思ふに、昔し翁が輩二三人、不圖此業に志を興せし事なるが、はや五十年に近し。今頃かく迄に至るべしとは、露思はざりしに、不思議にも盛んになりし事なり。〔同　上〕

と云うたのは、實に理りある言だ。

西善三郎等の著譯

マーリンの釋辭書の譯成らず

一昔長崎にて西善三郎はマーリンの釋辭書を全部飜譯せんと企しと聞しが、手初迄にて事成らずと聞けり。明和安永の頃にや、本木榮之進といふ人、一二の天文暦說の譯書有りとなり。其餘は聞く所なし。此人の弟子に志築忠次郎といへる一譯士ありき。性多病にして早く其職を辭し、他へ遷り、本姓中野に復して退隱し、病を以て世人の交通を謝し、獨學んで專ら蘭書に耽り、群籍に目をさらし、其中彼文科の書を講明したりとなり。文化の初年吉雄六次郎、馬場千之助などいふもの、其門に入りて彼屬文並に文章法格等の要を傳へしとなり。〔蘭學事始〕

〔一二〕杉田玄白（二）

田沼の蘭學鼓吹

杉田玄白は、大通辭西善三郎の言にて、蘭學を修めんとすることを一時思ひ止つたが、〔參照　一一〕されど當時和蘭風は、世間を吹き渡り、固より此の儘息む可くもなかつた。而して當時の和蘭風なるものは、實に執政者田沼意次の、鼓吹に由るもの少くなかつた。意次の鼓吹は、必ずしも經世の大處より然かしたのではなく、只だ彼の好奇心と、所有欲と、而して所謂る當時流行の山師風の爲めであつた。併し何れにしても、鼓吹は鼓吹で、前野、杉田等一派の蘭學者が、間接に其惠に浴したることは、固より掩ふ可からざる事だ。

和蘭器物の玩賞

其頃より世人何となく、彼國（和蘭）持渡りのものを奇珍とし、總て其舶來の珍器の類を好み、少しく好事と聞えし人は、多くも少くも、取聚て常に愛せざるはなし。殊に故の相良侯（田沼意次）執政の頃にて、世の中甚だ華美繁華の最中なりしにより、彼舶よりウエールガラス 天氣驗器　テルモメートル 寒暖驗器　ドンクルカームル 水液輕重清濁驗器　ドンドルガラス 震雷驗器　ホクトメートル　暗室寫眞鏡　トーフルランターレン 現妖鏡　ゾンガラス 觀日玉　ルーブル 呼遠筒　といへる類ひ、種々の器物を、年々持越し、其餘諸種の時計、千里鏡、ならびに硝子細工物の類、あげて數へがたかりしにより。人々其奇巧に甚だ心を動し、其窮理の微妙なるに感服し、自然と毎春拜禮の蘭人在府中は、其客屋に夥しく聚るやうになりたり。（蘭學事始）

和蘭客屋の繁昌

此の如く和蘭客屋は、或る意味では、一種の博覽會場の如く、或る意味では、一種の臨時學校の如き觀を呈した。惟ふに、天正年代より、文祿慶長にかけて、當時の世間が、耶蘇宣教師を通じて、外國の文物に親んだ以來、殆んど二百年を隔て、再び此風を煽揚し來りたるものであらう。

外科醫バブル

何れの年といふとは忘れしが、明和四五年の間なるべし。一とせ甲必丹はヤン・カランス、外科はバブルといふもの來りし事あり。此カランスは、博學の人、バブルは外科巧者のよしなり。大通辭吉雄幸左衞門は、專ら此バブルを師としたりと。幸左衞門後幸作、號は耕牛と云へり。外科に巧みなりとて、其名高く、西國中國筋の人、長崎へ下り、其門に入る者、至て多し。此年も蘭人に附添來れり。翁（玄白）夫等の事を傳へ聞しゆゑ、直に幸左衞門が門に入り、其術を學べり。これによりて日々、彼客屋へ通ひたり。一日右のバブル、川原元伯といへる醫生の舌疽を診ひて療治し、且刺絡の術を施せしを見たり。扨々手に入りたるものなりき。血の飛び出す程を預め考へ、これを受るの器を餘程に引はなし置たるに、飛迸の血、てうど其内に入りたりき。是れ江戸にて刺絡せしの始なり。其頃翁年若く、元氣は强し、滯留中は怠慢なく客館へ往來せしに、幸左衞門一珍書を出し示せり。これは去年初

バブル醫術の巧妙

玄白一書を借受く

て持渡りしヘーステル（吉雄）人名の、シュルゼイン外科治術といふ書なりと。我深く懇望して、境樽二十挺を以て交易したりと語れり。これを披き見るに、其書說は、一字一行も讀む事能はざれども、其圖を見るに、和漢の書とは、其趣大に異にして、圖の精妙なるを見ても、心地開くべき趣もあり。よりて暫く其書をかり受け、せめて圖ばかりも模し置べきと、晝夜寫しかゝり、彼在留中に其業を卒へたり。これによりて或は夜をこめて、鷄鳴に及びたりし事もありき。（同上）

人氣蘭風に向ふ

【一三】和蘭風の流行

實に田沼時代に於ける、和蘭風は社會を吹き廻はし、一世の流行を來たした。如何に彼等が篤學でありしよ。

和蘭は醫術並びに諸々の技藝にも精しき事と、世にも漸く知り、人氣何となく化せられ來れり。此頃よりも專ら、官醫の志ある方々は、年々對話といふ事を願て、彼客屋へゆき、療術方藥の事を聞給ひ、又天文家の人も、同じく其家業の事を問ひ給へり。當時は、其人々の門人なれば、同道し給へる事も自由なり。左あるにより、其方々の門人と唱へ、出入もありたり。長崎は御常法ありて、猥りに旅館への出入はならぬ事なるに、江戸は暫くの間の事なれば、自然と構もなき姿なりき。（蘭學事始）

平賀源内

源内の才氣

此の如く和蘭醫學は云ふ迄もなく、和蘭流は、天下公許の事となり。然もそれが世間の風尚を鼓吹しつゝあるに際し、平賀源内の如き奇才出で來りて、山師的氣分を、此中に漂はし、更らに一層之を煽り出した。

其頃平賀源内といふ浪人者ありき。此男業は本草家にて、生得て理にさとく、敏才にして、能く時の人氣にかなひし生れなりき。何れの年なりしか、右にいふカランス（參照一二）といへる加比丹參向の時なりしが、或る日彼客屋に

人集り酒宴ありし時、源内も其座にありしに、カランス戯に一つの袋を出し、此口試みに明け給ふべし。あけたる人に參すべしといへり。其口は智慧の輪にしたるものなり。座客次第に傳て、さま〳〵工夫すれども、誰も開き兼たり。遂に末座の源内に至れり。源内これを手に取り、暫く考へ居りしが、乍ち口を開き出せり。座客はいふに及ばず、カランスも其才の敏捷なるに感じ、直に其袋を源内に與へたり。

これよりして、甚だ親しみ厚くなり、其後はたび〳〵客屋へ至り、物産の事を尋問へり。又ある日カランス、一の棋子の如き形の、スランガステーンといふ物を出し示せり。源内これを見て、其の功用を問ひ歸り、翌日別に新に一箇の物を作り出して持ち行き、カランスに見せたり。カランス是を見て、これは前日見せ示せし物と同品なりと云へり。源内曰く、示さるゝ所の品は、貴國の産物か、又は外國にて求め給へるものかと問ふに、これは印度の地方別意蘭といふ所にて求め來れりと答ふ。源内又問て曰く、其國にては如何なる所に産するものといへば、カランス曰く、其國にて傳る所は、此物大蛇頭中より出る石なりといへり。源内聞て、それは左様にはあるまじ、是は龍骨にて作りし物なるべしと云ふ。カランス聞ていふ、天地の間に龍といふものはなき物なり、如何にして其骨にて作るべしといへり。是に於て源内己が故郷なる讃州小豆島より出せる、大なる龍齒につゞきたる龍骨を出し示して、是卽ち龍骨なり、本草綱目といへる漢土の書に、蛇は皮を換へ、龍は骨を換ふと說けり。今我示す所のスランガステーンは、此龍骨にて作れる物なりといへり。カランス聞て、大いに驚き、益々其奇才に感じたり。

これによりて、本草綱目を求め、右の龍骨を源内より貰ひ得て歸れり。其返禮としてボヨンストンス禽獸譜、ドトニュース生植本草、アンボイス貝譜などいへる、物産家に益ある書物共を贈りたり。是等の事も、直對接話にて、辯じたる事にはあらず。附き添たる内通詞、部屋附などいへる者にて、其情を通じて辯ぜしことにて、一字一言通知せしことにあらず。其後源内彼地

スランガステーン

加比丹の感嘆

種々物産書を贈らる

（長崎）へ遊歴し、蘭書蘭器なども求め來り、且つエレキテルといへる奇器を手に入れ歸府し、其の機用の事も漸く工夫して、遍く人を驚かせり。〔同上〕

惟ふに平賀源内は、實に田沼時代に於ける山師氣分を、代表する一人物であつたであらう。

第三章　蘭學興隆の現象

【一四】和蘭學興隆の氣運到來す

蘭書來る

和蘭風が、一般に流行するにつけて、和蘭の書籍なども、別段官許と云ふとは無かつたが、之を所持する人も出で來つた。杉田玄白同藩―若州小濱藩の―醫中川淳菴は、本草學を好み、和蘭物産の學にも志あつて、田村藍水、田村西湖などゝも同志にて、毎春參向せる和蘭通詞共とも往來した。然るに杉田玄白は、彼の手引にて、蘭書を得るの機會を得た。

玄白和蘭解剖書を得

明和八年かのとの卯の春かと覺えたり。彼客屋に至りて、ターヘルアナトミと、カスパリエスアナトミといふ、身體内景圖說の書二本を取り出し來り、望人あらばゆづるべしといふ者ありとて持歸り、翁（玄白）に見せたり。もとより一字もよむ事はならざれども、臟腑骨節これまで見聞する所とは、大に

異にして、これ必ず實驗して圖說したるものと知り、何となく甚だ懇望に思へり。

岡新左衛門の助力

且つ吾家も從來、和蘭陀流の外科を唱ふる身なれば、せめて書筐の中にも備へ置たきものと思へり。然れども其頃は、家甚だ窶々しくして、これを求むるに力及びがたかりしより、我藩の大夫岡新左衛門といへる人のもとに持行き、しか〳〵の次第なれば、此蘭書買求め度と告たり。然れども力の足らざるは是非なしと語りしかば、新左衛門聞き、それは求め置て用立つものか、用立つものならば、價は上より下し置るべき樣、取計ふべしといへり。其時翁、それは必ずかふといふ目當迚はなけれども、是非ともに用立つものにして、御目に掛くべしと答へり。傍に小倉左衛門後青野と改むといふ男居たりしが、それは何卒調へ遣はさるべし。杉田氏はこれを空くする人にはあらずと、助言したり。依レ之いと心易く、願も望の如く調ひ得たり。最れ翁の蘭書手に入りし始めなり。〔蘭學事始〕

蘭書和譯を欲す

此時杉田玄白三十九歳、彼は未だ和蘭の文字を讀むことを知らなかつた。然も彼は和蘭の學問には、頗る傾倒してゐた。

扨旬々平賀源内などと出會し、時に語り合しは、逐々見聞する所、和蘭實測究理の事共は、驚入りし事ばかり。若し直に彼國書を和解し見るならば、格別の利益を得る事は必せり。されども是まで、其所に志を發する人のなきは、口惜き事なり。何とぞ此道を開くの道はあるまじきや、迚も江戸抔にては及ぬ事なり。一書にても其業成らば、大なる國益とも成るべしと、只其及び難きを嘆息せしは、毎度の事なりき。然れども、空しくこれを慨嘆するのみにてありぬ。

實地觀察の機會を得

玄白は既に和蘭の解剖書を手に入れたり。此上はせめて實地に就て、其の圖と對照して觀たしと望んでゐたが、偶然にも其の機會は、到來した。

然るに此節不思議に、彼國解剖の書手に入りし事なれば、先其圖を實物に照し見たきと思ひしに、實に此學開くべきの時至りけるにや、抑々頃は三月三

玄白の喜び

日（明和八年）の夜と覺えたり。時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衛といふ男より、手紙もて知らせ越せしは、明日手醫師何某といへる者、千住骨ケ原にて腑分いたせるよしなり。御望あらば、彼方へ罷り越れよかし、と言ふ文をこしたり。

豫て同僚小杉玄適といふもの、其以前、京都の山脇東洋先生の門に遊び、彼地に在し時、先生の企にて、觀臟の事ありしに、此男之に從ひ行て親しく視たるに、古人諸說、皆空言にて信じがたき事のみなり。上古に九臟と稱せり。今五臟六腑の目を分ちたるは、後人の杜撰なりなんどいへる事の話もありし。其時東洋先生臟志といふ著書をも出し給ひたり。（寶曆四年）翁其書をも見し上の事なれば、よき折あらば、翁も自ら觀臟してよと思ひ居たりし。此和蘭解剖の書も、初て手に入し事なれば、照し視て、何れか其の實否を試むべしと、喜び一かたならぬ幸の時至れりと、彼處へ罷る心にて、殊に飛揚せり。

〔同上〕

寶曆の歳明和の歳京都に於て

此の如くして、漸く醫術と云ひ、蘭學と云ひ、其の興隆の運は近づき來つた。

我が國人體解剖の始め

吾邦解剖を創造するや、寶曆中醫官山脇東洋（道作）西京に於て寶曆四甲戌年閏二月七日、京兆尹酒井若州侯に請て死刑の罪人の屍を獄中に解く。其後明和庚寅四月二十五日又西京の郊外に於て、荻野豪洲門人古河醫官河口信任をしてこれを解しむ。共に皆書を作て刊行す。臟志山脇解屍編河口是なり。其後享和壬戌初冬荻野の門人中達若村の二氏官に請て解視す。其他天明癸卯の橋南溪解く所、寛政丁巳の柚木太淳、同戊午の小石解く所、皆成書あり。爾後小森桃塢、文化壬申、文政辛巳兩度解く、亦圖說あり、解臟圖譜と名く。（中略）

西洋一千七百三十一年（我が享保六年辛丑、清の康熙六十年也）大醫學與般亞單（ヨハンアダム）姓闕兒貳（ヤコルムス）思名の撰する所の打保（ターフル）縷亞那（アナトミー）都米と云ふ書を以て、解剖書の大成せる者とす。此書を譯して漢文に綴れるは、杉田玄白の解體新書なり。解剖譯書は此を以て嚆矢とす。〔温知醫談〕

【一五】人體解剖實驗

玄白の學者的態度

流石に杉田玄白は、學者らしき態度を持つてゐた。彼は獨り解剖の實驗を專らにするを欲せず、之を其の學友と與にせんとした。特に彼に多しとするは、其慶を前野良澤に negative ちたる事だ。

同志を誘ふ

扨斯る幸を得し事を、獨り見るべき事にあらず、朋友の内にも、家業に厚き同志の人々へは、知らせ遣はし、同じく視て業事の益には、相互になしたきものと思ひ量りて、先同僚中川淳菴を初め、某誰と知らせ遣はせし中かに、良澤へも知らせ越したり。

良澤をも誘ふ

扨良澤は翁よりも、齢十ばかりも長じ、我よりは老輩の事にてありし故、相識にこそあれ、常々は往來も稀に、交接うとかりしかど、醫事に志篤きは、互ひに知り合たる中なれば、此一學に漏すべき人にはあらず。先早く申通じたく思ひたれども、さし掛りし事、且つ此夜も蘭人滯留の折なれば、彼客屋にありけるゆえ、夜分にはなりぬ。俄に知らすべき便りもなし。如何せんと存せしが、臨時の思付にて、先手紙調へ、知れる人の許に立寄り、相謀りて本石町の木戸際に居たりし辻駕の者をやとひ、申遣はせしは、明朝しかく〳〵の事あり。望あらば早天に、淺草三谷町出口の茶屋まで、御越しあるべし。翁も此處まで罷越し、待合すべしと認め、置捨にて歸れと持せ遣しけり。

〔蘭學事始〕

蘭學興隆幸運相接し來る

若し此際良澤を誘引しなかつたならば、解剖書飜譯の擧も、恐らくは差し當り行はれなかつたであらう。縱令誘引しても、良澤が出で來らなかつたならば、亦た同樣であつたであらう。然も蘭學興隆の幸運は、相接して來た。

其翌朝とく支度整ひ、彼所に至りしに、良澤參り合ひ、其餘の朋友も、皆々參會し、出迎たり。時に良澤、一つの蘭書を懷中より出し、披き示して曰く、

良澤參り合ふ

これは是れ先年長崎へ行きたりし時、求め得て歸り家藏せしものなりといふ。これを見れば、卽ち翁が此頃手に入りし蘭書と同書同版なり。是れ誠に奇遇

なりとて、互ひに手をうちて感せり。

良澤の內談

扨良澤長崎遊學の中、彼地にて習得聞置しとて、其書をひらき、これはロングとて肺なり、これはハルトとて心なり・マーグといふは胃なり、ミルトといふは脾なりと、指し敎へたり。然れども漢說の圖には、似るべくもあらざれば、誰も直に見ざる內は、心中にいかにやと思ひしことにてありき。

執刀者

これより各打連立て、骨ケ原の設け置し觀臟の場へ至れり。扨腑分の事は、屠者の虎松といへるもの、此事に功者のよしにて、兼て約し置しよし。此日も其者に刀を下さすべしと定めたるに、その日其者俄に病氣のよしにて、其祖父なりといふ老屠、齡九十歲なりと云る者、代りとして出たり。健なる老者なりき。彼奴は若きより腑分けは度々手にかけ、數人を解たりと語りぬ。

從前の解剖

其日より前迄の腑分といへるは、屠者に任せ、彼が某所をさして肺なりと敎へ、これは腎なりと切り分け示せり。夫を行き視し人々看過して歸り、我々は直に內景を見究めしなどいひしまでの事にてありしとなり。固より臟腑に其名の書記してあるものならねば、屠者の指し示すを視て、落著せしことにて、其頃までのならひなるよしなり。

解剖の結果

其日の彼老屠が、彼れの此れのと指し示し、心肝膽胃の外に、其名なきものをさして、名は知らねども、己れ若きより數人を手にかけ解分けしに、何れの腹內を見ても、此處にかやうの物あり、かしこに此物ありと示し見せたり。圖によりて考ふれば、後に分明を得し動血脈の二幹、又小腎などにてありしなり。老屠又曰、只今まで腑分の度々、其醫師がたに品々をさし示したれども、誰一人其は何此は何々なりと、疑れ候御方もなかりしといへり。良澤相俱に携へ行し、和蘭圖に照し合せ見しに、一としていささか違ふ事なき品々なり。古來醫經に說たる所の肺の六葉、兩耳肝の左三葉、右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形狀も、大に古說と異なり。官醫岡田養仙老、藤本立泉老などは、其頃迄七八度も腑分し給ひし由なれども、皆千古の說と違ひしゆゑ、毎度〳〵疑惑して不審開けず、其度々に異狀と見しものを寫し置れ、つ

大に古說と異

ら〳〵思へば、華夷人物違ありやなど、著述せられし書を見たる事もありしは、これが爲なるべし。扨其日の解剖事終り、とてもの事に、骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨共を拾ひとりて、かず〳〵見しに、舊說とは相違して、只和蘭圖に差へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり。

〔同　上〕

驚天動地の機緣

此の如くして解剖實驗を了した。而して此れが蘭學に於ける、驚天動地の機緣を來したるは、實に意外とや云はむ、意中とや云はむ。

【一六】解體新書翻譯の著手

頗る警發さる

百聞一見に若かずとかや。前野良澤、杉田玄白等は、一たび親しく人體解剖を實驗して、頗る警發する所あり、玆に彌よ其の所藏の蘭書に就て、研究の志を起した。

三人の述懷

歸路（小塚原よりの）は良澤、淳菴（中川）と翁（玄白）三人同行なり。途中にて語り合しは、扨々今日の實驗一々驚入、且これまで心付ざるは恥べき事なり。苟も醫の業を以て、互に主君〳〵へ仕る身にして、其術の基本とすべき、吾人の形體の眞形を知らず、今迄一日〳〵と其業を勤め來りしは、面目もなき次第なり。何とぞ此實驗に本づき、大凡にも身體の眞理を辨へて醫をなさば、此業を以て、天地間に身を立るの申譯もあるべしと、共々に嘆息せり。

研究相談成る

良澤もげに、尤千萬同情の事なりと感じぬ。其時翁申せしは、何とぞ此ターヘルアナトミアの一部、新たに翻譯せば、身體內外の事、分明を得、今日療治の上の大益あるべし。いかにもして通詞等の手をからず、讀み分けたきものなりと語りしに、良澤曰く、予は年來蘭書よみ出し度の宿願あれど、これに志を同うする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各かた彌々これを欲し給はゞ、我前の年、長崎へもゆき、蘭語も少々は記臆し

居れり。それを種として、共々よみ掛るべしやといひけるを聞、それは先づ喜ばしき事なり。同志に力を戮せ給らば、憤然として志を立、一精出し見申さんと答へたり。良澤これを聞き、悅喜斜ならず、然らば善はいそげといへる俗說もあり。直に明日私宅へ會し給へかし。如何やうにも工夫あるべしと深く契約して、其日は各々宿所〳〵へ別れ歸れり。〔蘭學事始〕

蘭人の猛烈行

實に此の如き機緣によりて、蘭學が興隆の運に向うたるを憶へば、今更ら感慨に禁へざるものがある。今日の學者が、先人の猛志、厲行に負ふ所の深甚、多大、以て知る可し。

解體開始

其翌日良澤が宅（鐵砲洲中津藩邸）へ集り、前日のことを語り合ひ、先づ彼ターヘルアナトミアの書にうち向ひしに、誠に艫舵なき船の、大海に乘出せしが如く、茫洋として寄べきなく、只あきれにあきれて居たる迄なり。されども良澤は兼てより、此事を心に掛け、長崎迄もゆき、蘭語並びに章句語脈の間の事も、少しは聞覺え聞ならひし人といひ、齡も翁などよりは、十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐ事となしぬ。翁いまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立し事なれば、漸くに文字を覺え、彼諸言をもならひしことなり。〔同　上〕

解體困難

如何に大膽であるよ、未だ一字を知らずして、直ちに解剖書の翻譯を試みんとするは。

二日一語

扨此書を讀み初るに、如何樣にして筆を立べしと談じ合しに、迚も始より內象の事は、知れ難かるべし。此書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。其名所は皆知れたる事なれば、其圖と說の符號を合せ考ることは、取付きやすかるべし。圖の初とはいひ、かた〳〵先づこれより筆を取り始むべしと定めたり。卽ち解體新書形體名目篇これなり。

其ころは、デのヘットの、又アルス、ウエルケ等の助語の類も、何れが何やら心に落付て辨へぬ事ゆゑ、少しづゝは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば眉といふものは、目の上に生じたる毛なりと有

るやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には、明らめられず。日暮る迄考へ詰め、互ににらみ合て、僅一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて有りしなり。〔同　上〕

古人の努力

眞に古人の學問に就て辛苦の事が、思ひやらるゝ。蘭學の興隆も、決して唯だ好奇とか、一時の出來心とかのみの爲めではなかつた。唯だ此の如く彼等が眞劍に、生眞面目の努力に依るものであつた。

【一七】解體新書成る

困難想像に難し

彼等が飜譯事業の困難は、とても今日から想像が出來ない程であつた。適當の字書もなければ、文法の大略さへも、能く心得たる者はなかつた。然も彼等は一分刻みに、刻みあげて進み行いた。

フルヘッヘンド

或る日、鼻の所にて、フルヘッヘンドせしものなりとあるに至りしに、此語わからず。是は如何なる事にてあるべきと考合しに、如何にもせんやうなし。其頃ウォールデンブック釋辭書といふものもなし。ようやく長崎より良澤求め歸りし、簡略なる一小冊ありしを見合たるに、フルヘッヘンドの釋註に、木の枝を斷ちたる迹、其迹フルヘッヘンドをなし、又庭を掃除すれば、其塵土聚り、フルヘッヘンドすといふ樣によみ出せり。これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼たり。時に翁（玄白）思ふに、木の枝を斷りたる跡癒れば堆くなり、又掃除して塵土あつまれば、此れも堆くなるなり。鼻は面中に在りて、堆起せるものなれば、フルヘッヘンドは、堆といふことなるべし。然れば此語は堆と譯してよ如何といひければ。各これを聞て、甚だ尤なり、堆と譯さば、正當すべしと決定せり。其時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり。如レ此事にて堆と譯語を定めり。其數も次第〳〵に增しゆく事となり、良

澤はすでに覺居し譯語書き留をも、增補しけるなり。

くつわ十文字

其中にもシンネン（精神）などいへる事出しに至ては、一向に思慮の及びがたき事も多かりし。これらは亦往々は可レ解時も出來ぬべし、先づ符合を付置べしとて、丸の內に十文字を引きて記し置たり。其頃不レ知ことをば、轡十文字と名けたり。毎會いろ〳〵に申合せ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、其苦さの餘り、それも又くつわ十文字〳〵と申たりき。

翻譯了解

然れども、爲すべき事は固より人に在り、成るべきは天にありの喩へ如くなるべしと、如レ此思ひを勞し、精を硏り、辛苦せしこと一ケ月に六七會なり。其定日は、怠りなく、わけもなくして各相集り、會議して讀合ひしに、實に不レ昧者は心とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く增し、讀に隨ひ、自然と彼國の事態も了解する樣にて、後々は、其章句の疎き所は、一日に十行も其餘も、格別の苦勞なく解し得るやうにもなりたり。尤春毎參向の通詞どもへも聞糺せし事もあり。又其間には解屍の事もあり、亦獸畜を解きて、見合せし事も度々のことなりき。〔蘭學事始〕

然も此の翻譯の事業に、相ひ會して、努力したる人々も、十人十色にて、各〻其の所志は一でなかつた。今日杉田玄白の語る所によりて見れば、玄白其人の所志は。

されど所志一ならず

此會業怠らずして勤たりし中、次第に同臭の人も相加り、寄りつどう事なりしが、各〻志す所ありて、一樣ならず。翁は一たび彼國解剖の書を得、直に實驗し、東西千古の差あることを知り明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日もはやく此一部を用立つ樣になし見度と、志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく。一日會して解する處は、其夜翻譯して草稿を立て、それに付きては、其譯述の仕かたを、種々樣々に考へ直せし事、四年の間、草稿は十二度迄認かへて、板下に渡すやうになり、遂に解體新書翻譯の業成就したり。

解體と命名

抑江戸にて、此學を創業して、賻分といひ古りしことを、新に解體と譯名

し。且社中にて、誰いふとなく、蘭學といへる新名を首唱し、我東方國州、自然と通稱とするにも至れり。是れ今時のごとく隆盛となるべき、最初嚆矢なり。〔同　上〕

玄白の回顧

玄白は、自から其の苦心の跡を顧みて、語りて曰く。

翁は元來疎漫にして、不學なるゆゑ、可成りに蘭說を翻譯しても、人のはやく理會し、曉解するの益あるやうになすべき力はなく、去れども人に託しては、我本意も通じがたく、やむことなく拙陋を顧ずして、自ら書綴れり。其中に精密の微義もあるべしと思へる所も、解しがたき所は、疎漏なりと知りながらも、强て解せず。惟意の達したる所ばかりを、擧置けるのみなり。……彼是考へ合すれば、迚も我より古をなすことなれば、いづれにしても、人々の曉じ易きを目當として、定る方を決定して、或は翻譯し、或は對譯し、或は直譯義譯と、さまざまに工夫し、彼に換へ此に改め、晝夜自ら打掛り、右にもいへる如く、草稿は十二度、年は四年に滿ちて、漸く其業を遂げたり。此の如くして破天荒の譯書、解體新書は出で來つた。是れ實に安永三年八月であつた。〔同　上〕

紫石盤水榛齋諸先生の業

解體新書以後の著譯

鸞齋杉田先生創めて遠西鳩鹿模斯撰む所の內景書を譯し、解體新書を著し世に行はる。此よりして皆人始て內景の實際を窺ふことを得たり。令嗣紫石先生、又家學を勤め內外醫書を飜譯し、益々和蘭の醫術を唱ふ。又盤水大槻先生師命を奉じ、鳩鹿模斯の原譯を校訂し、註證を補譯し、他說を參考して大に詳覈を加へ、重訂解體新書を著はす。今榛齋先生勃郎蛤爾都、八爾歇印、協兒歇印、應斯盧烏等の諸名家、內景の數書を課輯して醫範を著はす。凡そ辭簡約なれば、要領を得易く、義詳密なれば底蘊を究盡す。初め解體新書の約說出で、後に醫範の精詳に及ぶ。天意と云べし。〔醫範提綱〕

【一八】蘭學社中（一）

社中同人

直接に云へば、解體新書の翻譯、間接に云へば、蘭學の興隆、何れも杉田玄白の所謂る、社中の協同戮力の功に歸せねばならぬ。今ま試みに、其の社中の各個人に就て語れば、盟主とも云ふ可き前野良澤、總支配人とも云ふ可き杉田玄白、其他桂川甫周、中川淳菴、石川玄常、烏山松圓、嶺春泰、桐山正哲等であつた。

良澤の目的

今ま玄白をして、彼等に就て語らしめよ。

同盟の人々、毎會右の如く寄つどゐし事、かくありしといへども、各其志す所異なり。是れ實に人の通情なり。先づ第一の盟主とする所の良澤は、奇異の才ゆゑ、此學を以て終身の業となし、盡く彼言語に通達し、其力を以て、西洋の事體を知り、彼書籍何にても讀得たきの大望ゆゑ、其目的とする所、康熙字典などの如き、ウォールデンブックを解了せんといふ事に、深く意を用ひたり。それゆゑ世間浮華の人に、多く交る事を厭ひたり。

君侯の了解援助

（原註　此學開べき天助の一つには、良澤といふ人、天性多病と唱へ、此頃より常に閉戸して外へも出ず、亦漫りに人にも交らず。特此業を以て樂みとし、日を消し居れり。其君昌庶公は、其の素心の情合をよく知召し、彼は元來異人なりと、深く咎もし給はず。然れども本務に怠りがちなりければ、勤方疎漫なりと上へ告げ來りし人ありしに、公の曰く、日々の治業をつとめるも勤めなり、又其業のためをなし、終に天下後世生民の有益たる事を爲んとするも、取りも直さず其業を勤るなり。彼は欲する所ありと見ゆれば、其このむ所に任せ置くべしとて、一向に打捨さし置れたり。すでに其前後ボイセン（人名）プラクテーキ抔いへる內科書を求められ、其紙端に御印章押し給ひて與へ給ひし事もあり。元來其號を樂山と呼びしが、高年の後、自ら闌化と稱せり。これは昔し君侯より賜はりし名なりと。これは君侯常に、良澤は阿蘭陀人の化物なりと、御戲れにのたまひしより出たり。其寵遇かくのごとき事にてありたり。これ故良澤心のまゝに、其學の修行出來たる事なり。）

雷同者の廢學

扨浮華の輩、雷同して從事せしも多かれども、創業の迂遠なるに倦て、廢するもの少からざりしに。此先生生涯一日のごとく、確乎として動かざりしゆゑ、其中には、今の如く、其業を遂げしも、あることと思はるゝなり。これ全く此の事開くるの時に遭しゆゑにや。〔參照　九、一〇〕

玄白公平の見

流石に玄白は、良澤に就て、語る所公平である、寛大である。學者動もすれば相凌ぎ、相輕んず。玄白の如きは、自ら主持する所、甚だ大なるも、他の長所、他の功勞を認むる點に於て、亦た決して吝でなかつた。

中川淳菴

彼は其の同僚中川淳菴に就ては、左の如く語つた。

中川淳菴は、兼て物産の學を好める故、何とぞ此業を勤め、海外物産をも知り明らめたき事を欲せり。（原註　又傍ら奇器巧技の事を嗜み、自ら工夫を凝して新製せるも、少からず。和蘭局方を譯し掛りしに、業を卒へず、天明の初年、脚症を患て、千古の人となれり。）

横春泰　鳥山松圓

又た彼は左の如く語りてゐる。

嶺春泰、鳥山松圓といへる男などは、頗る出精せしが、今は則ち亡し。同僚淳菴なども、新書上木の後なりけれども、五十に滿たずして世を早うせり。其頃往來せし者にて、今に生殘りしは、（文化十二年）翁よりははるか歳下の人なれども、弘前の醫官、桐山正哲などなり。

事業と壽命

凡そ何事にあれ、其業を大成せんとするには、天才と、勉强とは、固より必要であるが、それと同時に、壽命も亦た大切だ。前野良澤が、享和三年十月十七日、八十一歳にて歿し、杉田玄白が、文化十四年四月十七日、八十五歳にて歿したる。何れも斯學の開發に取りては、見逃し難き一事だ。

【一九】蘭學社中（二）

桂川甫周

社中の秀才は、桂川甫周であつた。然も彼は醫師中の門閥家だ。玄白は彼に就て、斯く語りてゐる。

最初より會合ありし、桂川甫周君は、天性頴敏逸群の才にてありしゆゑ、彼文辭章句を領解し給ふ事も、萬端人より早く、未だ弱齡とは申、社中にても末賴母敷芳しとて、賞嘆したりき。其父甫水君は、青木先生よりアベセ二十五字をはじめ、僅ながら蘭語なども傳へ給ひしを聞覺え、少しは其下地もあ

りし故にや、退屈のやうすもなく、會毎に怠りなく出席し給へり。〔蘭學事始〕

と。而して更らに甫周に就て、

甫周の熟心

桂川君は、さしてこれといふ目當とては見えねども、前にもいへる家柄なれば、只何となく此事を好み給ひ、齢は若し氣根は強し、會毎に來り給ひて、此擧に加り給へり。〔同　上〕

甫周の著譯

と云ひ、更らに又た左の如く語りてゐる。

桂川家の事は、前にもいへる如くなり。甫周君は拔群の俊才ゆゑ、凡そ和蘭の事にも略通じ、其名聲四方に走せ、尤常に其業事の起は、公上にも知し召れし事なれば、時々西洋筋の事は、和解御用も命ぜられし趣なり。其草稿其家には有べし。和蘭藥撰、海上備方抔云ふ、譯說の著書ありと聞ども、未だ成熟の書を見ず、年未だ六十に滿ずして、千古の人となり給へり。〔同　上〕

而して玄白、彼自身に就ては、既記の如く告白してゐる。〔參照　一七〕

玄白の志

彼は又た自から語りて曰く、翁はこれらとは、大に違ひ、始て觀臟し、和蘭圖に徵して千古の差あるに驚き、いかにも、先此一事を早くあきらめ、治療の用を助けたく、又世醫法術發明の間にも、用立つやうになしたき志のみなりければ、何とぞ一日も早く速に、此一部見るべきものとなしなんと心掛け、一書の譯をし、其事成らば望足りぬと心を決し、思を興せしに依て、深く彼諸言を覺え、他事を爲すの望はなかりしなり。五色の糸の亂れしは、皆美なるものなれども、赤とか黃なるとか、一色に決し、餘は皆きり棄る心にて思ひ立しなり。〔同　上〕

單に解體新書の完成にあり

玄白の　志は、全く實用にあり、其の實用も單に解體新書の完成にあつた。彼は多きを望まず、近きを採らんとした。

同社の人々、翁が性急なるを時々笑ひしゆゑ、翁答へけるは、凡そ丈夫は草木と共に朽べき者ならず。かた〳〵は身健かに、齢は若し。翁は多病にて歳も長けたり。往々此道大成のときには、迚も逢ひがたかるべし。人の生死は預

め定めがたし。始て發するものは、人を制し、後れて發するものは、人に制せらるといへり。此故に翁は急ぎ申すなり。諸君大成の日は、翁は地下の人となりて、草葉の蔭に居て見侍るべしと答ければ、桂川君などは、大に笑ひ、後々は翁を諢名して、草葉の蔭と呼び給へり。〔同　上〕

玄白の壽命

されど人生は、實に意外の事が多くある。桂川甫周は、文化六年六月、五十九歳にて逝いたが、玄白は爾後八個年生存し、文化十四年四月、八十五歳迄生き延びた。玄白は又た彼自身と前野良澤とに就て、斯く斷案を下した。

良澤玄白二人の功

世に良澤といふ人なくば、此道開くべからず。且翁が如き素意大略の人なくば、此道かく速かに開くべからず。是も亦天助なるべし。〔同　上〕

協同の効果

如何にも允當の見だ。蘭學の興隆は、全く此の兩人に負ふ所多大であつた。而して良澤は學問に專らに、玄白は實用に專らに、各〻其の欲する所を行うた。而して兩者は期せずして、蘭學の興隆に協同一致的の効果を奏した。

新書公刊の疑懼

『解體新書』の公刊に就ては、多少の疑懼と、多大の決心とを、交も有した。紅毛談さへ絶版となりし程の事なれば、西洋の事は、假初にも唱ふる事はならぬ事にや。……若し私かにこれを公にせば、萬一禁令を犯せしと、罪を蒙るべきも知られず。此一事のみ甚恐怖せし所なり。……我醫道發明の爲なれば、敢て苦しからずと自ら決定し、何れにも翻譯といふ事を公にする初を唱ふべしと、竊かに覺悟を極めて決斷せし事なり。〔同　上〕

公認の便宜

然も其の公認に就ては、更らに少からざる便宜を有した。

是は其事の最初なれば、何とぞ此一部恐れ多くも冥加の爲め、公儀へ献じ奉りたき志願なりしが、幸ひ同社桂川甫周君の御父甫三君は、前にいへるが如くの舊友なりければ、此法眼に謀りしに、其取扱推擧により、御奥より内献し奉りぬ。斯く障りもなく事濟しは、難レ有御事なりき。又翁が從弟吉村辰碩は、京都に住居せり。此人の推擧を以て、時の關白九條家並に近衛准后内前公、及び廣橋家へも一部づゝ奉りぬ。（原註　これによりて、三家より日出度古歌を自ら染筆して賜り、又東坊城家よりは、七言絶句の詩を賦して賜はりぬ。）尤時の大小老

中方へも、同じく一部づゝ進呈したり。何方とても、何の障れる事もなく相濟みぬ。これらによりて、大に此擧に於る安堵をなしたりき。これ和蘭書譯書公けになりぬるはじめなり。〔同　上〕

此の如くして蘭書の翻譯は、公認せらるゝに至つた。

大槻玄澤畫像（盤水存響所載）

第四章　蘭學の大成者

【二〇】大槻玄澤（一）

玄澤と諸先輩の年齢

蘭學の興隆に就て、前野、杉田の兩先輩に次で、最も功勞ある者を求めなば、大槻玄澤に過ぐる者はあるまい。彼は寶暦七年九月廿八日、奥州―陸中―西磐井郡中里に生れた。彼と蘭學諸先進、若しくは海外新知識者との年齢の相違を、對照すれば、杉田玄白は二十五歳の長者にて、和蘭外科の開業をなし、田村元雄は四十歳の長者にて、始て物産會を江戸湯島に開き。其他青木昆陽は六十歳、前野良澤は三十五歳、吉雄幸作―耕牛―は三十四歳、平賀源内は二十六歳、司馬江漢は二十一歳、林子平は二十歳、而して小石元俊は八歳、桂川甫周は六歳、宇田川玄隨は三歳の長者であつた。

玄澤の父

玄澤の父大槻玄梁は三十六歳、當時は千葉元良と稱し、阿蘭陀流外科醫として、

郷里に開業してゐた。明和二年彼が九歳の時、元良は田村侯に祿仕し、大槻玄梁と改稱し、翌年一關町に移住した。明和六年彼は十三歳にして、同藩外科醫建部清庵の門に入つた。

建部清庵

清庵亦た篤學の士であつた。彼は明和七年、蘭方醫者の疑義四條を門人の游學に托して、江戸大家に質さしめたが、其報を得なかつた。安永元年、蘭書飜譯の事あるを傳聞し、疑義を再錄し、杉田玄白に質せしが、遂ひに其答を得た。此事に就て、杉田は斯く語りてゐる。

清庵の先見

解體新書、未だ上木の前なりしが、奥州一の關の醫官建部清庵由正といへる人、はるかに翁（玄白）が名を聞傳へて、平生記し置たる疑問を送りし事あり。其書に記せし事ども、我業に就きては、感嘆する事多く、これまで相識れる人にもあらず、翁と志を同うするも、千里一契なり。其書にいふ。これまで阿蘭陀流外科片假名書の傳書を、此術の基とするまでなるは、扨々殘念なり。世に有識の人出でゝ、昔し漢土にて佛經を飜譯せしごとくに、阿蘭陀の書をも和解なしたらば、正眞の阿蘭陀醫流成就すべしと記せられたり。これは其時より二十餘年前よりの懸念とさこえたり。實に其見解感ずるも餘あり。はからずも翁其人にあたりしを踴躍し、吾等の知己千載の一奇遇なりと答書を報じ、夫れより往復絶ずして、書信を通じ、其緣によりて品々の事もあり。門人等其書通を書きあつめ、蘭學問答と名け留たり。（原註　後に子弟等藏版となしぬ。和蘭醫事問答と題せしものはこれなり。）〔蘭學事始〕

玄澤玄白の門に入る

此にて建部清庵の何人であるかは、略ぼ知る可きであらう。而して清庵の門に學びたる大槻玄澤が、江戸に出でゝ、杉田玄白の門に入りたるは、安永七年三月にして、實に彼が二十二歳の時であつた。此事に就て、玄白は斯く語りてゐる。

蘭學の進歩迅速

翁が初一念には、此學今時（文化年度）の如く盛になり、斯く開くべしとは、曾て思ひなさざりしなり。今に於てこれを顧ふに、漢學は章を飾れる文ゆゑ、其開け遲く、蘭學は實事を辭書に其まゝ記せし者ゆゑ、取り受けはやく開け早かりし歟。又實は漢學にて、人の智見開けし後に出たる事ゆゑ、かく速か

なりしか知るべからず。然れども斯業の自然に開くべきの氣にや。〔同上〕

清慮子弟

と前置し、更らに進んで、左の如く語りてゐる。

此ころより前に記せる東奥の建部氏は、翁には二十歳ばかり長たる翁なるが、不思議に書牘の往復ありしが、我答書を得て、實に狂喜啻ならずと申越せし趣なれども、身の老朽を如何せんとて、其息亮策を我門に入れ、續いて其門人大槻玄澤といふ男をさし登せて、我門に入れたり。此男の天性を見るに、凡そ物を學ぶ事、實地を踏まざればなすことなく、心に徹底せざる事は、筆舌に上せず。一體豪氣は薄けれども、すべて浮たる事を好ず。和蘭の究理學には、生れ得たる才ある人なり。翁其人と才とを愛し、務めて誘導し、後々は良澤翁に託して、此業を學せしに、果して勉勵怠らず、良澤も亦其人を知りて骨法を傳へしゆゑ、程なく彼書を解する事の大概を曉れり。〔同上〕

玄澤の天性

此の如く玄澤は、從遊する幾許もなくして、其師玄白より折紙を附けられたる、蘭學者となつた。

清慮玄白ニ其生の奇遇につながる

玄澤鶴齋に學ぶ

吾が藩の清慮建部先生、世々瘍醫を掌り、專に和蘭の法を守る。余二世師とし事ふ。先生骨て患ふ。其法和蘭とは云へども傳來までにて疑はしきことのみなりとて、常に余が家大人及び餘の門弟子等と共にこれを語り、其書に就て眞術を求めん事を欲すれども、能く此學に通じたる人を得ざること殆ど三十年に及べり。近時鶴齋先生に書信を通じて、往復すること再三に及しが、二先生の宿志時に契合すること、實に四海にして比肩、千里にして同情なり。其奇遇の由詳に往復書牘の中に具す。後ち遂に令子亮策及び余をして鶴齋先生の塾に就かしむ。二人命を奉じて從事すること此に年あり。余が短才謬劣なりといへども研精講究の功にや、僅に其藩籬を窺ふことにはなりぬ。〔蘭學階梯例言〕

【二一】大槻玄澤（二）

遂に良澤に學ぶ

蘭學は大槻玄澤に至りて、殆んど大成した。而して玄澤は前野良澤に負ふ所、最も大であつた。彼は先づ杉田玄白の門に學んだが、其の堅苦と、其の慧解とは、兩ながら相俟つて、他の一年乃至二年を要するところを、三月乃至四月にて成し遂げ、爲めに大いに玄白を驚かし、遂ひに其の勸めによりて、前野良澤に就て學んだ。

玄澤の進歩

當時良澤は、門を杜ぢ、專ら蘭書の研究に耽り、漫りに雜客に面會せず。然も玄澤が、十回ばかりも訪問したるを見て、其の篤志に感じ、遂ひに其の蘊奥を傾けて、彼に授けた。其上玄澤は、當時和蘭趣味の濃厚なる福知山城主朽木昌綱の家に出入し、安永九年二十四歳にして、既に六物新誌の譯稿を起すに至つた。

玄澤の改名

『六物新誌』とは、一角、洎夫藍、木乃伊、人魚等、六個の題目に就て、譯述した博物書だ。而して彼は從來元節と稱したが、此歳に至りて、始めて玄澤と改めた。此れは其父玄梁の意を襲いだ乎、將た玄白の玄と、良澤の澤とを湊合した乎。玄白は尙ほ玄澤に就て、斯く記してゐる。

長崎遊學

其際同僚淳菴（中川）桂川法眼（甫周）又福知山侯抔と往來して、此業を講究せり。又大に志を興し、此上は西遊して長崎に至り、直に彼通詞家に從ひ學び試たきよしをはかりしゆゑ、我も良澤も喜び許し、汝壯年行け矣、勉めよや。其事を濟さば、宿業益々進む可しと慫慂せしにより、愈憤起して志を負笈に決したり。然れども素より貧生の事なれば、力の及ばざる事どもなり。翁其志に感じ、專ら其力を助けんと思へども、翁も其頃は生計かたく、思ふ程ならねば、力の及べるだけは之を助け、且御同學たりし福知山侯も、淺からぬ恩遇ありて、やがて彼地にいたり、本木榮之進といへる通詞家に寄宿し敎を受け、又彼に問ひ此に謀り、油斷なく修行して歸府したり。爾後は江戸永住の人となる事を得たり。〔蘭學事始〕

江戸ト居

と。惟ふに玄澤が長崎遊學は、天明五年十月にして、彼が二十九歳の時であつた。而して彼は翌年五月歸府し、本藩仙臺侯の醫員に擧げられ、食祿一百廿五石を給せられ、江戸居住となり、始め京橋一丁目に、八月に至りて本材木町に

移り、其の學堂を芝蘭堂と號した。而して前きに起稿したる六物新誌は、此歳、大阪木村蒹葭堂によりて上木せられた。

玄澤の抱負

『六物新誌』に題言七則あり。何れも玄澤が其の氣燄を騰げ、抱負を吐きたるもの。其中には、和蘭學の淵源を論じて、

和蘭學の一塗、白石新井先生に草創し、昆陽青木先生に中興し、蘭化前野先生に休明し、鶴齋杉田先生に隆盛なり。故に近時事に斯に從ふ者、皆な四先生に淵源せざるは莫し。

蘭學者の種類

と。此れは洵に其通りである。彼は又た、世の蘭學を好む者を分類次第して、儒者、武人、醫師、書家、工匠となし、而して之に就て、左の如き批評を下してゐる。

儒者は天文に左袒し、兵家は地理に擊節し、醫者は心を剛剝（解剖）に醉はしめ、書匠は精描に流涎し、巧工は奇器に慕羶す。

と。此にて如何に當時和蘭學が、社會の各方面に影響を與へんとし、且つ與へつゝあつたかゞ判知る。玄澤は更らに其の兩師に就て、斯く觀察してゐる。

蘭化先生の誠懇

夫れ譯の物たる、天文、地理、器械の書の如き、卽ち少しく之を誤ると雖も、然も尙ほ之を補ふ可し。但だ內外醫方の書は、卽ち人命の係る所、故に一たび之を失ふときは、卽ち其の生靈に禍する者、復た追ひ救ふ可らず。是れ懼る可くして而して愼しむ可き也。故に蘭化先生甚だ之を懼れ、深く之を愼しむ。而して其の懼れ、愼しむことの甚だしきや、其の譯する所の書、座右に堆を作すと雖も、亦た敢て人に示さざる也。是れ其人敦厚誠慤にして、而して夫の人命を重ずるの意、至て深きが故也。

鶴齋先生の論述

鶴齋先生は則ち是れと異る也。其意に以爲らく、一章の中、一句縷析ならず、一方の內、一味明辨ならずと雖も、然も其の章の前後の全義に於て、妥當を爲し、其方の立意に於て、之が趣を得るときは、則ち之を解し之を譯して、輙ち其の大要を揭示す。……是其人豁達大略にして、通變の識を具るが故なり。

と。而して更らに一步を進みて曰く、

兩先生の長を學ぶ

茂質（玄澤）以爲らく、今の時に方て、和蘭學の此の二先生に於ける、其一を缺けば則ち不可也。何となれば則ち、蘭化先生微りせば、則ち此學精密の地位に至ること能はざる也。鶴齋先生微りせば、則ち此學海內を鼓動して、今日の如くなる有る能はざる也。是に於て茂質（玄澤）其間に周旋し、而して誠懇を蘭化先生に效ひ、大略を鶴齋先生に學びなば、則ち亦た可ならず乎。惟ふに此れが玄澤の僞らざる告白であらう。乃ち彼は前野、杉田二先生の學を承けて、之を大成する抱負を持つてゐたのであらう。

【三三】蘭學階梯

其の出版

『蘭學階梯』は、蘭學の興隆に向つて、一新紀元を劃したる著述と云ふ可きであらう。

其の內容に橫文學を加ふ

此書は大槻玄澤が、長崎游學後、卽ち天明八年戊申三月、同人三十二歲の時に出版せられた。

此書は飜譯でなく著述である。然も蘭學其物に關したるものにして、書中には橫文字を加へてゐる。而して文字の讀み方、綴り合せ、單語、會話、文法など、橫文字に振假名して、譯がつけてある。良に蘭學の初步者に取りては、調法の書であつた。

出版の苦心

併し此書の出版には、多少の苦心を要した。從來杉田玄白の名によりて—安永三年八月—出版せられたる解體新書は、飜譯書で、全く漢字漢文であつたから、差支なかつたが、蘭學階梯には橫文字が加つてゐる。此の天明八年から十八年前、後藤梨春の著はしたる紅毛談は、其中に阿蘭陀の橫文字二十五字を入れてあつた爲め、絕版せられた。然るに此書は、張膽明目して、和蘭の文字は愚か、其の讀み方、綴り方さへ記してゐる。然もそれが無事に通過したのは、田沼意次の和蘭嗜好の時代に遭遇し、獻上本の手續を取つた爲めであつた。

上卷內容

此書の成りたるは、天明三年癸卯九月にして、玄澤二十七歳の時であつた。然も尙ほ其意に滿たざる所があり、之を質さんが爲めに、長崎に游學したのだ。此書は上下二卷に分ち、上卷には、總說、通商、裨益、精詳、慕效、興學、立成、禦侮、勸戒の九節あり。專ら蘭學者の心得となるべき、一般的知識を與へたものだ。

下卷內容

下卷には、蘭學其物に就て說明してゐる。文字、數量、配韻、比音、修學、訓詁、轉釋、譯辭、譯章、釋義、類語、成語、助語、點例、書籍、學訓の十六節だ。

蘭學志望者の增加

此の一卷を讀めば、略ぼ蘭學とは、何物であるかと云ふことが、諒解せらるゝ。當時此書が驛迎せられ、此の一書によりて蘭學の氣運を煽揚したるは、決して少々ではなかつたであらう。

今迄は世間の人が、阿蘭陀文字を見ても、何か反物の模樣か何かの樣に見え、一向分らずであつたが、此『蘭學階梯』を見て、橫文字も讀めば讀めるものだといふ感じを起して、蘭學に志す者が殖へ、玄澤の門に入る者が多く出來た。其の入門したる者の姓名を書いた卷物が、今私の家に殘つて居りますが、自筆の姓名の下には、皆血判がしてある。

是亦た天助の一

とは、玄澤の孫、大槪文彥博士の語る所である。

尙ほ此書に就ては、其師杉田玄白も、斯く語りてゐる。

扨嘗て編集し置ける蘭學階梯といふ書ありしを、歸府の後藏板して、同志に示せり。此書出し後、世の志あるもの、これを見て、新に憤悱し、志を興せしも亦少なからず。此人を生じ、此等の書の出る事となりしも、翁が本志を、天の助け給ふの一つにやと思ひし事なり。

蘭學者の一般抱負

と。如何にも其通りであらう。而して此の蘭學階梯の板木は、今尙ほ大槪家に保存せられてゐる。

當時蘭學者が、如何に偉大なる抱負を持つてゐたかは、此の『蘭學階梯』の中に於ける勸戒の一節中に、左の言あるを見て知る可し。

吾人泰平の恩澤に沐浴し、鼓腹欣抃、豐衣美食するを得て、草木と同じく朽

るは、丈夫の恥る所なり。茲に和蘭勸學警戒の語あり、曰、『メン、ムート、エーテン、ヲム、テ、レーヘン、マール、ニート、レーヘン、ヲム、テ、エーテン』と。此を譯すれば、人は天地の間に生を稟け、飲食を爲して、生命を全うす。然れども飲食のみする爲に生を稟くるにはあらずと云ふ事にして、これを切意すれば、各其職とし、受る所を務め、天下後世の裨益となるの一功業を立よと敎る意を含めり。吾黨竊に此の見解あればなり。敢て彼の邦俗を欽羨するにはあらず。……余等世々和蘭瘍醫に箕裘す。……他の諸藝は、和漢古へより其人に乏しからず。余不佞が淺劣、何ぞ贅せん、冀くは和漢千古人の未だ曾て知らざる所の事を、國に起さんことを謀ればなり。

探長補短の志

と。彼等は實に此の如く眞劍に斯學に從事した。而して要は彼の長を採つて、我の短を補はんとするにあつた。彼が同志の士、福知山城主朽木昌綱が、此書に序して、

吾が先王の諸邦に通ずる、各其美を求む、華夷を撰ぶに非ず。故に儒佛並び存し、器帛兼て傳ふ。甚意を見る可き也。

と云うた通り、更に和蘭の新方面に向つて、此の擇美の精神を擴充せんとしたるに外ならなかつた。

第五章　平賀源内

【二三】物産學と平賀源内（一）

山師の時代

田沼時代は、眞面目なる蘭學者の群起したる時代に止まらず、亦た山師の時代であつた。山師とは一言にして云へば、新たに利を興す工面工夫を運らす徒輩のことだ。而して此れは執政者田沼其人が、最も其方の趣味を持つてゐたとが、亦た其の風氣を鼓舞し來る、一の動機ともなつたであらう。

物産學の勃興

和蘭學は、一方に醫術の進歩開發に、大なる刺戟を與へたと同時に、他方には亦た當時の所謂る物産學にも、同樣の刺戟を與へた。物産學とは、云はゞ本草學を、利用厚生の方面に引きつけたる學問で、或は藥草の栽培とか、或は藥品の採拾とか、或は製煉とか、若しくは砂糖の製造とか、植物學や、博物學や、化學、若しくは物理學に渉りたることを、總稱したるものであつた。而して蘭學の開拓者青木昆陽の如きは、乃ち或る意味に於ては、物産家であつた。彼が甘藷考や、若しくは蘭人の說を參酌して、櫻木考、一角考を著はしたるが如きは、其の證據であらう。

田村元雄

田村元雄亦た物産家の一人だ。彼は藍水と號す。江戸の生れにて、世々醫業に從うた。元雄は本草家として、夙とに名を著はし、寶曆中擧られて、幕府の醫官となつた。時に幕府では、人參製造所を建てたが、元雄が其の管理者となつた。

朝鮮人參の移植

日本に朝鮮人參を移培するとは、三たび試みられて、三たび失敗した。享保年間、對州宗氏より又た六根を献じた。將軍吉宗之を日光山下に栽植しめ、其の後三たび其の地を移し、漸く生殖するを得、更らに之を諸州に頒布し、大いに其の栽培を奬勵した。而して元雄は、尤も人參栽培に妙を得た。彼は一擧にして熟參千餘本を得た。此の如くして人參は、當時無二の貴重藥品として、漸く民間に播布せらるゝに至つた。

物産會を開く

元雄は亦た采藥の爲め、日本の三十餘州を周遊し、人參、甘藷、藥種、其他の物産の繁殖、製造に就て、發明する所が少くなかつた。而して寶曆七年丁丑、彼は物産會を、始めて江戸湯島に開らき、翌年亦た神田に開いた。此の物産會は、後年の博覽會の嚆矢とも云ふ可きものであらう。然も元雄の業を、大いに恢宏にしたのは、其の高足門人平賀源内であつた。而して源内は、實に田沼時代に於ける、代表的山師の一人と云ふ可きであらう。

平賀源内の年齢

平賀源内が、奇才であつたことは、其の友人杉田玄白の所記によりて察す可しだ。〔參照　一三〕彼は實に八方無礙の良き頭腦の持主であつた。眼快手利とは、彼のことであらう。彼の死は、杉田玄白の撰した墓誌銘には、安永己亥（八年）牡病人を殺す、獄に下る、十二月十八日疾んで獄中に沒す、時に年五十一とある。それを溯れば、享保十四年己酉の生れだ。或は又た其の死を四十八歳とする說もあれば、それに從へば、享保十七年壬子となる。何れにしても、杉田玄白よりも年長で、前野良澤よりも年少で、兩者の中間にあつた。

源内の立身

彼は讃州志度浦の產にて、其父茂左衞門茂國は、高松藩米廩の小吏であつた。彼は十三歳の時から、藩醫三好某に就て、本草學を修め、十九歳にして、藩主松平賴恭に仕へ、御藥坊主となり、四人扶持銀十枚を賜はつた。藩主も亦た當代流行の物產癖あり、廣く和漢の鳥獸、草木、魚蟲、介貝、金石類を蒐集し、其の形像を寫生し、和漢名、和蘭名を註記した。源内は藩主の命によりて、其事に與つたとも云ふ。彼は幼時より非凡にして、天狗小僧の名あつたと云ふ。左もある可し。但だ鳩溪實記に十歳の頃、家老眞田宇右衞門の茶坊主となりて、金蛇を捕へ、胡麻油の壺に入れたなどと云ふは、恐らくは小說であらう。何れにしても、彼が中年以降の奇矯の行爲を見れば、少年の時も、それを豫想す可き行爲のあつたとは、相違あるまい。

【二四】物産學と平賀源内（二）

長崎に赴く

源内は寶暦二年、彼が二十四歳の時、當時の文化鄕たる長崎に赴いた。彼は此地に於て和蘭の言語、及び諸技術を學びたりと云ふも、其の學び得たる所、幾許の程度であつた乎。恐らくは只だ人を嚇かし、世を瞞する元資に過ぎなかつたであらう。

歸つて元雄に學ぶ

斯くて寶暦三年には、江戸に出で、田村元雄に就て、物産の學を修めた。彼は本草家として、既に素養があつた。其の元雄の門人として、出藍の譽ありたるは、彼が機敏にして、聰穎の稟質に照らし、固より疑ふ迄もない。彼は元雄の物産會開設の後を承けて、〔參照　二三〕寶暦九年には、自から會主となりて、湯島に於て開會し、同十年には、社友松田某市ヶ谷に開會し、源内も亦た之に列し、同十二年には、源内自から會主となりて、藥品會を開いた。此の會や、元雄寶暦七年、八年兩回の開催を合して五度。其の出品の數二千有餘種に及び、出品者は三十餘國に及んだ。而して主人側より出品するを主品と云ひ、來會者側より出品するを客品と稱し、而して其の運搬の費用等は、出品者側の自辨とした。

物産會藥品會を開く

物類品隲

源内の著書『物類品隲』は、實に此の物産會出品中より、其の優秀のものを撰擇し、それを一書に編して、説明を加へ、圖繪を添へたるもの。而して附錄には、人參培養、及び甘蔗培養、並にその製造方を説き、源内自畫にて、蔗を軌り漿を取るを圖した。惟ふに此書は、源内の著作中、最も眞面目にして、且つ有益の一であつたらう。

物産採收と本草書遞作

彼は諸方を遊歷し、且つ人を諸方に派し、藥草や、物産の採拾に努力した。乃ち駿河國志太郡大賀山にて、石筆材を發見した。此れは今日に云へば、鉛筆の類であらう。彼が本草學に關する著述には、『火浣布略説』『五百介圖』『神農本草經圖註並倭名考』『食物本草』『日本彰譜』『藥草木石禽獸魚介蟲譜』及び『萬國圖』があつた。

源内の機敏

彼が蘭學に於ける造詣は、幾許あつた乎。恐らくは彼の資性として、小面倒なる文字や、文法の詮議などよりも、耳學問や、目學問にて、其の用を足したであらう。如何に彼が他に秀でゝ、機敏であり、器用であり、工夫に長じ、聰慧であつたかは、杉田玄白の所記に徵しても知る可しだ。〔參照　一三〕

田沼に取入る

源内は田沼意次が、和蘭癖、舶來珍器蒐集癖に乘じて、此に取入るの術を講じ、且つ意次によりて、其の山師的氣分を滿足せしめんとした。意次の周邊には、種々の雜輩が群がり來つた、而して源内も亦た其の一人であつた。惟ふに彼は、田沼意次の爲めに、調法がられたに相違あるまい。併し田沼も小身より出でたるものなれば、固より源内に、勝手次第に翻弄せらるゝが如き愚物ではなかつた。されば彼は、寧ろ源内を利用したるも、源内から利用せられなかつたであらう。元來田沼は、決して油斷も、隙もあつた男ではなかつた。

兩者の意氣投合

傳説によれば、源内は田沼の臣三浦莊司によりて進見した。其の節田沼は彼を嬖し、歸らんとするに際し、手づから砂糖折を與へた。源内は之を架上に措き、半月許りの後、之を開いたが、其底には小判百兩藏してあつた。此に於て源内も田沼の知遇に感じ、その爲めに骨を惜まず、畫策し、田沼も亦た資を給して、源内に其の工夫を實地に應用せしめたと云うてゐる。併し砂糖の重量と、黃金の重量との相違などは、源内程のものが、決して氣付かぬ筈はない。されば上記の傳説の如きは、恐らくは信ずるに足るまい。されど田沼元來大山師だ。されば此の大山師と、小山師とが、或る程度に於て、意氣の投合したのは、決して不思議はあるまい。

高松侯に仕ふ

當時源内は、高松侯の仕籍を脫せず、尙ほ銀十枚と、四人扶持との俸を受けてゐた。彼は屢ば之を辭退したが、容易に允されなかつた。然も彼が苦ろに請うた爲め、寶曆十一年九月二十一日、漸く其の願意は聞き屆けられた。

其方願の趣、御内々達ニ御聽一、格別の思召を以て、御扶持切米被ニ召上一、永御暇被ニ下置一候。尤御屋敷へ立入候儀は、只今迄の通に可レ被ニ相心得一候。但他へ仕官之儀は、御構被レ遊候。

但し仕官御構

惟ふに仕官御構の一件は、源内に取りては、意外千萬であつたであらう。

寶暦十三年癸未の板行

源内の物類品隲

平賀源内は讃岐の人なり。浪花にありて年を經しが、江戸に出で學校を建んと思ひて出來りしが、寶暦の末の風俗を見て其事の行れざるを知れり。性質物産を好みし故、田村元雄（坂上登）につきて物産の事を講究し、物産會をなす。凡物産會は寶暦七年丁丑、田村元雄はじめて、江戸湯島にて興行、翌年戊寅、又神田に會し、同九年己卯平賀氏湯島に會し、同十年庚辰松田氏市谷に會し、同十二年壬午、平賀氏また湯島に會す。亭主方より出すものを主品とし、諸子の携へ來るものを客品とす。凡三十餘國の物産、二千餘種の品の内にすぐれたるをゑらびて一書とし、物類品隲と名付く。寶暦十三年癸未の板也。當時躋壽館の物産會も是にならへるなり。〔奴師勞之〕

【二五】平賀源内の致仕

致仕の目的

源内が高松侯より仕を致した目的は、果して野鶴閑雲となりて、自由に其の運動を逞うするにあつた乎。將た豫て取り入りたる田沼意次に仕んが爲めであつた乎。彼が致仕の表向の理由は、『作者部類』には、醫學研究の爲めとあつたと云ふが、眞に醫學の研究ならば、高松侯の俸祿を受けつゝも、其事に妨げなかる可し。何れにしても高松侯が、其請を允しつゝ、他家へ奉公を構うたのは、聊か意地惡しき仕打と云はねばならぬ。

田沼に仕へん爲か

若し果して田沼に仕んが爲めならば、此にて源内は、全く其の目的を、沮止せられたものと云はねばならぬ。

不平家となる

何れにしても源内は、一方に於ては、山師的計企者として、種々の營利事業を目論みたが、他方には、不平家として、其の著書もて、世を諷し、俗を罵り、盛んに胸中の鬱憤を漏らした。彼が祿仕を辭せんと申出たのは、寶暦十一年二月で、其の允を得たのは、同年の九月、卽ち彼が三十三歳の時であつた。彼が田沼の門に出入したのは、寶暦八年、田沼が萬石の列に入り、源内二十九歳の

頃であつた。

致仕以來著述に擅顕

されば高松侯を田沼に乗り換へん爲めに、致仕したのではない乎と疑ふ者あるも、多少の理由はある。而して高松侯が其請を允しつゝも、他家への仕途を構うたのは、預じめ彼が胸底を忖度して、其の進路を塞いだものと揣摩するも、亦た據る所なしとせぬ。源内は必ずしも奉公構ひの爲めに、一種の不平漢となつた譯ではあるまい。彼は本來の不平家であつたらう。されど致仕以來、彼の作物は、此の方面に擡頭し來つた。例せば、寶暦十三癸未の秋には『根南志具佐』を著はし、同年の冬には『志道軒傳』を著はしたるが如き、それである。

されど依然として種々の工夫

されど彼は必ずしも、戯作のみに耽つたのではない。彼は相換らず、種々の工夫をした。彼が眞面目の著作『物類品隲』は、同じく寶暦十三年五月に刻成した。〔參照　二四〕而して、彼が火浣布を製して、幕府に献上したのは、明和元年―寶暦十三年の翌年―で、『火浣布略説』の出板は、明和二年八月であつた。此歳に『神農本草經圖註並倭名考』も出で來りたれば、彼は相換らず、物産家として、其の方面に活動したとが判知る。

電氣機械を作る

而して明和七年には、彼が作中、尤も評判を取りたる『神靈矢口渡』を作つたが、然も此歳彼は再び長崎に遊び、吉雄幸左衛門に學び、電氣器械を製した。而して明和八年五月には、天草の陶土を採りて、海外輸出の陶器を製せんと

鑛山調査

を幕府に建白した。安永二年には、仙臺伊達侯の命を承け、其の封内の鐵山を調査した。又た同年の秋、秋田佐竹侯の聘に應じて、同地に赴いた。當時益戸滄洲の、源内の江都に還るを送るの序に曰く、

此歳の秋、東都の平賀氏は、大邦の招に因て、來りて州に客たること數月……蓋し平賀は物産の事に習へり。……角館より阿山に走り、府下に歸るに及び、遙かに周旋す。……嗚呼平賀の術、誠に奇に、富國利用、寧ろ之を廢すべけんや。

との語に徴すれば、彼が秋田侯の爲めに、阿仁銅山の經營、其他に畫策したるや知る可きである。

源内の死

安永三年には、『放屁論』を著はし、同五年には、『長枕褥合戰』や、『天狗髑髏鑑定緣起』を著し、安永八年には、戯曲『荒御靈新田神德』を著はしたが、其の十一月廿一日、過て人を殺し、十二月十八日、獄中に病死した。而して友人杉田玄白、之を橋場總泉寺に葬つた。時に五十一歳であつた。彼の人物に就ては、玄白の草したる碑銘、最も能く之を盡してゐる。

玄白作の碑銘

處士平賀君、諱は國倫、字は子彝、鳩溪と號す。風來山人と稱す。信州源心の後也。（平賀源心）先世難を避けて、讃州志度浦に徙り家す。君人と爲り磊落不羈、少くして才辯有り、氣を尚び剛傲、書を讀み章句を事とせず。高松侯擧げて小吏と爲す、嘆じて曰く、丈夫世に處す、當さに國家を益す可し。安んぞ能く鄕里に默せん哉。何も無く辭して四方に遊び、力を產物に窮め、理を山川に竭くす。兼て技術に精しく、諸侯に對すれば、則ち以て國を利し、庶人に對すれば、則ち以て身を利す。故に海內賢愚となく、悉く其名を知る。諸侯或は之を辟す、皆な就かずして曰く、人生適意を貴ぶ、何んぞ復た五斗米の爲めに腰を折らん哉。人或は妻を娶らんことを勸む。則ち曰く、今我四方に家す、何んぞ更らに之が累を求めむ、終に娶らず。君恒に客を好む、客至れば則必らず之を留め、爲めに酒饌を設け、日以て夜に繼ぐ。未だ曾て厭倦せず。君素恒產無し、之を以て囊中屢ば空し、而して晏然として省みず。君著す所の書、物類品隲五卷あり、世に行はる。其餘我方知らざる所の藥物、及び火浣布の類、自ら發明する者、百有餘種、旁稗官小說を好む、其撰又た若干卷あり。安永己亥狂を病み、人を殺し獄に下る。十二月十八日疾んで獄中に沒す、時に歳五十一。官法尸を取るを聽さず。其の諸姪相謀り、君の衣服屐を斂め、以て淺草鄕總泉寺に葬り、石を建つ。余君と舊あるを以て、故に余に之を銘せんと請ふ。銘に曰く。

終生娶らず

嗟非常人。好非常事。行是非常。何非常死。

墓碑破毀

右の墓碑は、玄白が私財を投じて建てたが、罪人の故を以て、官命もて之を毀たしめた。

碑文の意

此の碑銘によりて見れば、彼が致仕は、全く不羈自由の身たらんが爲めにして、他故なきものらしい。

【二六】山師としての平賀源内

源内の本領

平賀源内は、徒らに滑稽世を弄ぶ閑人ではなかつた。彼の本領は、所謂當時の山師であつた。山師とは單に金山とか、銀山とか、銅山とか、鐵山とかを握るばかりでなく、凡有る利用厚生の道に、新奇なる才覺、工面を爲す者を意味する所のその一人であつた。如何に彼が此の方面に、豐富なる知識と、分別とを持つてゐたかは、既記の天草陶土（參照　二五）もて、海外輸出の陶器を製造せんとする建白にて知る可しだ。

輸出向陶器製造建白

揖斐十太夫樣御代官所

肥後國天草郡深江村

一　陶器土

右之土天下無双之上品に御座候。今利燒、唐津燒、平戸燒等、皆々此土を取越燒候。其内今利、唐津は、日本國中普く行渡、唐人、阿蘭陀人も大に望可申由に御座候。

在來の天草品

一　天草にても、近年高濱村庄屋傳五衞門と申者、燒覺候得共、細工人不宜候故、器物下品に御座候。私存付候は、天草か、長崎にて、巧者成職人を呼集、器物之格好、繪之模樣等差圖仕、唐、阿蘭陀之物好に合候樣に、工夫仕候て、段々職人共を、仕込候はゞ、元來土は無類之上品に御座候得ば、隨分上燒物出來可仕奉存候。燒物之儀、荒方鍛煉仕罷在候、其上先年讃岐にて、私取立候職人共之内、器用なる者共御座候得ば、右體之者共呼寄、外國より相渡候陶器手本に仕、工夫を加へ候はゞ、隨分宜燒物出來可仕候。平戸燒など、隨分奇麗には御

職人養成

座候得共、未だ俗を離れ不レ申候。今利、唐津は、勿論之儀に御座候。今少之事にて、風雅に相成候得共、片田舍之職人共故、古より致來り候を、漸く仕覺候迄にて、新に工夫所へは不レ參、譬唐物、和蘭陀物を傍に置寫候ても、心に風流無二御座一候故、自然と下品に相成候。畢竟天草之燒物土は、南京燒、阿蘭陀燒之土よりも、拔群宜御座候得共、形不風流に御座候故、日本人外國物を重寶仕、高價を出候。若日本之陶器外國に勝れ候得ば、自然と日本物にて事足り候。尤近きを賤み遠きを尊び候は、常之人情に御座候得共、既に刀脇差、又は蒔繪之類、日本が萬國に勝れ宜御座候故、日本物にても事濟候。陶器も、日本製宜さへ御座候得ば、自然と、我國之物を重寶仕、外國陶器に金銀を費し不レ申、却て唐人、阿蘭陀人共も、調歸候樣に相成候得ば、永代之御國益に御座候。元來土にて御座候故、いか程遣ひ候ても、跡之滅候氣遣も無二御座一候。ケ樣之事は、甚廻り遠き樣なる事故、表立押ては難二申上一御座候得共、成就

國利民福の爲め

仕候得ば、御國益にて御座候。若成就不レ仕候ても、私一人之費、骨折のみに御座候間、少も有餘御座候得ば、內々にて、天草へ參、樣子次第にて、心覺之職人共呼寄、少々宛も製し出度奉レ存候。以上。

明和八年辛卯五月

平賀源內　印

見識卓越知るべし

此の建白は、恐らくは源內の思ふ樣に行はれなかつたであらう。されど如何に其の國產興隆の方面に於ける、彼の見識の卓越したるかは、現時天草の陶土が、日本の凡有る陶器に使用せられつゝあるを見ても、知る可きであらう。此れは彼が四十三歲の時にて、宛も前野良澤、杉田玄白等が、骨ケ原にて、罪囚解剖實驗し、解體新書飜譯著手と同時であつた。

諸所鑛山調査

源內は安永二年には、仙臺侯の爲めに、封內の鐵山の調査をなし、又た秋田侯の爲めに、阿仁の銅山を調査し、又た秋父山より爐甘石と稱する礦物を發掘し、同三年には荒川に舟を通じて、之を江戶に運輸したりと云ふ。此の爐甘石は、

炭酸亞鉛にて、亞鉛の原料なりと云ふ。

懷中鏡等の製造

彼は又た俗に自惚鏡と稱する、硝子板に水銀を塗りて製したる懷中鏡や、金唐革や、紅革や、或は伽羅の櫛を製した。而して彼が所謂るエレキテルの器械は、箱炭取やうの箱に、フラスコ（酒瓶）の底を、其の口程に圓く拔きて、其所へ心棒を通し、箱の中に横たへ、轆轤仕掛にて其の心棒を回轉すれば、フラスコと共にきり〳〵と廻り、其の硝子の面に、金鍍金したる針線の先きが接觸して、摩擦力を發し、傍へに碁盤をしつらひ、四本の足の下には、電氣の逃げ去らぬ爲めに、陶器の皿を受け、碁盤の上に、人を上らしめ、今頻りに摩擦力を發しつゝある針線の一端を、人の身體に觸るゝ時は、パッと火を生ず。此事頗る世上に喧傳し、諸大名より招待せられ、殆んど毎日のやうに、其の器械を使用して見せ、故らに室を暗くして、暗中に火を發せしめ、人目を驚かした。而して彼自ら語りて曰く、

エレキテル器械

電氣療法

抑も此器は、西洋の人、電の理によりて考へ、一旦工夫はつけたれども、其身の生涯にはならず、三代を經てやうやく成就したりといふ。阿蘭陀人といへども、知る者は至て少く、固より朝鮮、唐、天竺の人は、夢にも知らず。況乎日本開闢以來、創めて出來たるに於てをや。其の効用は、人の體より火を出して、病を治するなり。

一種の奇才

と。今日に於ても、電氣療法は、行はれつゝあれば、源内の言も、決して無稽の妄語と云ふ可きものではあるまい。兎にも角にも彼は一種の奇才であつた。

【二七】平賀源内と拔荷買

平賀鳩溪實記

平賀源内の一代記として、世に傳はる平賀鳩溪實記なるものは、天明八年の著述にして、安永八年彼の死を距る、九年後の著述だ。源内の後進にして、源内と面識ある太田南畝が頭書して、之を批評し、又た往々其誤りを訂正したるもの

あれば、強ち其の一切を擧げて、之を小說視す可きものではあるまい。その中にても、彼が長崎に於て、拔荷を買ふ一條の如きは、彼としては左もある可き事と思はる。

阿蘭陀物の流行

當時世の中は、愈よ驕奢となり、贅澤となり、和蘭物の如きは、上下を擧げて珍重し、持て囃した。特に執權田沼は、時計とか、寒暖計とか、硝子細工とか、遠眼鏡とか、顯微鏡とか、種々の奇器を、取り集め玩んだから、其勢は猶更ら一般を風靡した。當時江戸日本橋の通町邊には、兩側の商店何れも、長崎何々、阿蘭陀何々と、舶來物でなければ、夜があけぬと云ふ有樣であつた。

下剤ウルエス

就中笑ふ可きは、ウルエスと云ふ阿蘭陀製藥だ。其の看板は、明治の初期、田舍には、或は中期迄も存してゐたであらう。何人もウルエスとは、阿蘭陀語であらうと思うてゐたが、焉んぞ知らむ、此れは空の字を析いたるものにて、空字を三つに分れば、ウルエとなり、それにスの字を加へて、空すとなる。卽ち下劑を意味するものだ。此れは源内の頓智ではなかつたが、世間の和蘭陀好みの調子が、これにて窺はるゝではない乎。

密貿易

却說斯る次第なれば、當時密貿易の行はれたのは、決して不思議はなかつた。而してそれは長崎に限つたことではなかつた。

源内吉雄へ拔荷買ふ方法を問

源内は……吉尾（蜀山云、紅毛大通辭吉雄幸左衞門）が方へ心易く出入して、何卒拔荷を買はんと手段したるが、或時吉尾へ申けるは、我ら事何卒拔荷を調へたきもの也。尤拔荷の事は、天下の御法度にて、容易には成まじ、併し拔荷同前の事にて、申分の濟方有由承り及たり。貴殿などは數年の勤、定てケ樣の事は委しからんと申ければ……先拔荷と申は、天下の法度にて、殊の外大切なる事也。此拔荷買んと存ずる奴は、西濱邊にて獵師へ金子を取らせ、四五人を雇ひ、朝の内夜の引明る迄の働きにて御座候由。獵船を五島沖へ四五里も乘出し、朝ぎり深き内は、五島の役所よりも見へ兼て、海上へかゝり候を見濟し、夜の内に乘り付、唐船の向ふの方へ廻り候て、荷物を買とり、扨唐船の向ふの方へ船をもやひ、段々磯へ漕寄て、朝霧の暗き内、陸へ

上り候事也。

吉雄等の出訴手筈

此れが吉尾（雄）が源内へ語りたる、拔荷を買取る手段だ。然も吉雄は源内が先を廻りて、豫じめ源内の拔荷買取の船頭に申含め、その出訴を命じ置いた。

源内裏を撫く

源内は吉尾が許へは態と不レ歸、丸山邊の惡所へ赴き、家來を呼て申ける、其方はさきへ戻りて、唯今の船頭か、又は外の船頭らしき者、吉尾が宅へ來るや否やを見屆、早速我らへ知らすべし。……源内が家來は、始終得と見屆、丸山へはせ行、主人源内へしらせければ、源内は莞爾とうち笑ひ、長崎の者は、實に鼻の先の了簡計也。我彼等が胸中を計り、若我がなせると、又唐物等を買取し事を、若や知りたるかと、深く了簡して計りしに、一向に不レ知趣にて安堵せり。我荷物はもはや一昨日出したれば、三十里計りも行たるべし。早氣遣ふとなしと、悠々として吉尾が宅へ立歸り、常の通りにて居たりける。吉尾も船頭も、今や〳〵と待てども、源内來らざれば、すご〳〵と立歸り、源内に面談して咄終れば、源内吉尾に申けるは、拙者事永々御世話に相成り添し。乍レ去昨夜夢に我弟病死いたし候と見たり。……明後日出立可レ申といひければ、吉尾も何ともいふ樣なく、……心の内は本意なけれども、仕方なく相應なる餞別して、源内を戻しけり。……長崎の知惠を見せんとして、源内に欺れ、拔荷等も存分に買れしを、常々遺恨に思ひしとなり。

吉雄茫然

此れは固より此儘にて、受取る可き話ではあるまい。されど先づ當時の模樣の一斑が、此にて推察す可きであらう。

平賀源内の飛行船

雲中を乘る大船

源内は長崎より程なく江戸表へ着て、手を廻して求たる道具どもを知る人へ土産として贈りし。その中に雲中を乘る大船あり、圖左にしるす。

此雲中飛行船は紅毛の細工にして長崎へも來らぬ珍器也。然るに源内密かに蕾人へ便りて此度買取、船を疊んで荷物にして江戸表へ持參して、神田橋邊の御大名へ土産として遣しけるとなり。（神田橋の大名は田沼主殿頭なるべし）

評に曰、此飛行船の事近來流行せし本の圖を出せり。此船の紅毛より來りしは天明元年の頃にて源内が持參せしに相違なしと云説あれど、未レ詳二是非一。

風根

此船へ人の乘ること五六人を限る也。又雲中にて風止む時は、外に風根といふ物を下よりたゝらにて風を吹き上る也。風根は皮にて拵へ、常には疊んで置くと也。

源内評判よし

此風根を下より吹き上れば、雲中忽ち大風を生じて飛行船を飛す事妙也と。紅毛人是をもつて飛鳥を釣ること有と云。右の飛行船、去御大名に遣しけるが、今に其船、彼方にある由也。源内いよ〳〵世上評判よく、本草會日々に盛にして大勢群集し、又人參を植付んと御醫師方を語らひて、御用地等を拜借し、偏に醫學館の如く、和漢の珍器を集めて實に雅會と言はやしけるとなり。

〔平賀鳩溪實記〕

第六章　北方漸く多事

【二八】北方に於ける密貿易と開國（一）

露國との密貿易

密貿易、卽ち拔荷買は、西南方面のみではなかつた。東北方面に於ても、亦た此時に於て、隱然行はれ來つた。而して其の重なるは、露國との密貿易であつた。其の消息に就ては、仙臺藩の醫者工藤平助の『加模西葛杜加記』が、聊か之を語りてゐる。

工藤平助

平助は本來、紀州藩の醫者工藤太雲の子にして、幼にして仙臺藩の醫者工藤丈菴に養はれ、養父の後を承けて、藩の醫師となつた。然も彼は其志醫業でなく、從て當時の醫者の如く、頭も剃らず、刀を佩び、尋常の士人と、何等異なる所なかつた。彼は出でゝ四方に遊び、青木昆陽に師事し、中川淳菴、野呂玄丈などにも從學し、和漢書は固より、進んで蘭學にも及んだ。而して長崎に赴き、

親しく蘭人に接し、當時世界の大勢をも、略ぼ知るを得、遂ひに『赤蝦夷風說考』を著した。

赤蝦夷風說考

此書は上下二卷より成り、下卷は天明元年に脫稿し、爾後上卷を稿し、天明三年正月、之れが序文を加へた。其の下卷は、和蘭の書によりて、露西亞から

平助の經綸

カムチヤツカの事を記し、其の地方の地理や、又は松前人の私かに示したる、赤狄人物圖說を載せて、露人の來り迫りつゝあることを說明してゐる。而して其の上卷は、著者の經綸を述べてゐる。それは露國が漸次版圖を擴大し、漂流の日本人を撫育し、日本語さへも研究し、北海を回航して、既に我が地勢をも視察してゐる。されば我國は、之を輕々看過す可きではない。須らく先づ要害を固めねばならぬ。次には拔荷、卽ち密貿易を禁ぜねばならぬ。若し之を閑却せん乎、密貿易の手段は、愈よ出でゝ愈よ巧妙となり、底止する所を知るまい。されば今日の計は、消極的に密貿易を嚴禁するよりも、我より進んで公然露國と貿易を開くに若くはない。斯くすれば彼の人情も知り、風土も詳かにし、所謂る彼を知り己を知るともできる。又た蝦夷に金山が多いから、之を調べていよ〳〵金銀銅があつたならば、之を掘り出して、露國との交易に宛つ可きだ。而してその利潤を以て、蝦夷を開發しても宜しい。

露國公貿易論

一面蝦夷防備

又た露國と貿易をして、其の直段を、長崎に於ける唐、和蘭のそれと、比較し見れば、如何に彼等が、不當の利を貪つてゐるかゞ、明らかになるであらう。而して露國との貿易は、必ずしも北海の地に於てやるとは限らない。長崎を初めとして、總て要害の宜い港にて引受けて然る可しだ。若し萬一此儘に放下し去らん乎、カムチヤツカの者は、蝦夷と相合して、蝦夷も遂ひに露國の命令に從ふやうになり、蝦夷は全く我國より離れ去るととなるであらう。其時に及んでは、悔ゆとも及ぶなけむ。

開國國防の第一聲

此れが其の要旨である。要するに此れが、一方に於ては、開國の第一聲であり、他方に於ては、國防の第一聲であつたらう。

田沼の開國思想

惟ふに田沼意次も、國防などと云ふ問題は、姑らく措き、此の密貿易の事に就

意知また開國思想

社會の傾向

ては、必ず多少考慮する所があつたであらう。和蘭のチチングの記する所によれば、田沼は開國思想を懷いてゐたと云ふことだ。乃ち幕府は、外人を自由に國内に入れても、何等の損害無き事を知つたのみでなく、此れが爲めに、優秀なる科學藝術を學ぶの機會を得ることを知つて、國内を外人に解放せんとした。此れは老中松平津守の建議だと云ふ。(松平津守とは、當時若年寄攝津守忠恒?)斯くてその建議に原き、一七六九年(明和六年、此年田沼意次が、老中格となつた)に船舶の建造を許し、日本と外國との交通を開き、外人を國内に誘致す可しと提議したが、間もなく松平津守死して、行はれなかつた。

當時田沼山城守(意知)は、豪邁なる精神を持し、非常なる才識があり、父主殿頭(意次)と、種々の改革を企てんとし、又た開國の事をも圖つたが、他の諸大官の爲めに彈劾せられ、遂ひに暗殺せられた。而して山城守の死によりて、日本を外人に開放するの望は、全く絶えた。

以上の記事は、チチングが傳聞や、推測によりて記したるものにて、固より信を措く可きではないが、然も如何に當時の社會が、開放に傾いてゐたかゞ判知る。

久世平九郎の造船計畫

【二九】北方に於ける密貿易と開國 (二)

尚ほチチングの所記によれば、當時又た長崎奉行の丹後守(久世平九郎丹後守廣民、安永四年十二月三日浦賀奉行より轉任、天明四年三月十二日迄在勤)といふ人、チチングに托して、バタビヤより船大工を連れ來り、日本人に大小船舶の建造を教授せんことを求めた。此れは大阪から長崎へ銅を積み出す船舶が、途中に於て、破損することが多いからだ。されど瓜哇にある普通の船大工では、其の技術が十分で無く、又た短時日の間に功を擧ぐること難く、到底其の要求に應じ能はぬによつて、チチングは、丹後守に向ひ、自分が歸國の際、最も怜悧なる日本人を同行せし